慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜野文庫善本略解題(一)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1988
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.23 (1988.) ,p.335- 377
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信教授退職記念論集 資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000023-0335

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

浜野文庫善本略解題（一）

大沼晴暉

はじめに

浜野文庫は浜野知三郎氏旧儲の和漢書四千二百三十二部、一万一千四百九十八冊を指す。これが九州にあった斯道文庫に入蔵の経緯は、昭和十七年八月発行の「斯道文庫報」第十号に、文庫長春日政治氏が「飯塚訪書行」と題して認められている。

浜野氏は昨年十月物故されたが、氏の旧知であつた岡井慎吾博士が、遺族の依頼によつてその文庫の整理に従はれ、是亦氏が生前の恩誼に報ゆべく始終の労を取つた野田松雲堂主人に諮つてその目録の作成を完了されたのである。さて本年五月初旬その目録を送つて来て、遺族の希望としてなるべく一括して譲渡したいが、買取りくれずやと当文庫に話があつた。よつて先づ麻生〔太賀吉〕氏の耳に入れておいたところ、やがて、麻生氏から購入してやらうといふ

ことになつたのである。かくて浜野文庫の図書全部を挙げ、別に書幅・書簡類をも合せて、一百有餘個の荷物が六月中旬飯塚の麻生本邸に着いた。越えて七月八日松雲堂が友人杉野君を伴つて西下し、我が文庫からも大塚主事が両三名を率ゐて加勢に出で、目録と引合せての引渡しかつは分置上の整理をも行つてゐたのであるが、七月十二日の日曜日は、恰も主人麻生氏が在邸されるから一往整理中の本を見に来てはどうかと知らせがあつたので、蔵内顧問・笹月研究員と談らつて出かけて行つた。

昭和十七年六月発行の「斯道文庫報」第九号の「斯道文庫処務日誌抄」には、昭和十七年五月四日の条に「東京松雲堂野田文之助老来訪」、同じく五月二十五日「東京浜野貞行氏来訪」、翌る二十六日「大塚主事浜野氏ト共ニ麻生理事長ヲ訪問、故浜野知三郎先生四十年ニ亙リ御蒐集ノ蔵書一括シテ譲受クルコトニ決定」と見える。なお第十号には、七月十二日「麻生邸ニ於テ整理中ノ浜野文庫本一見ノ為春日文庫長・蔵内顧問・笹月研究員ノ三氏飯塚行」と右の記事と符牒を合せ、七月十五日「松雲堂野田文之助・新松堂杉野宏ノ両氏浜野文庫整理ヲ了ヘテ来訪」。翌る十六日「麻生理事長寄託ノ浜野文庫本到着」と記されている。

しかし、この到着とは浜野文庫の全図書ではなく、春日氏の文に「元来普通本は〔麻生〕本邸に備へつけられるのみならず、麻生塾並に斯道文庫にも分置されるといふので、我等もその選別けの仕事に交りつゝ、その概略を見て行った」とある如くである。その結果、「普通本に於て注目されることは、先づ辞書・字典の豊富に集められてゐること」で、それは「氏が曽て漢和辞典を作つた際、その用に供する為もあつたのであらう」。先ずこの実用書が斯道文庫に送られ、文庫員の利用に供せられた。

昭和二十年六月十九日、福岡市地行西町にあった斯道文庫は空襲の直撃弾を受けて焼失したが、幸図書の主要部分は南畑村不入道に疎開し、浜野文庫も飯塚の麻生本邸に保管されてあったので、先の辞書類等一部利用に供されていた書物を除き、大部分は幸に烏有の災を免れ得たのである。

この空襲時に、事務室の金庫に保管されてあった浜野文庫に鈐すべき蔵書印は、熱のために湾曲したが稀有の災にも焼失を免れ、それを記念して戦後そのまま押捺された。本文庫の「浜野文庫」印が曲がっているのはそのためである。

浜野文庫本は税法の関係から、已むを得ず本文庫に寄託の形をとっていたが、税法が改正され、昭和五十五年七月、日本私学振興財団を通じ、麻生氏（麻生セメント株式会社）よりの指定寄附として、慶応義塾に寄贈された。本文庫の創立二十周年と浜野文庫の寄贈とを記念し、昭和五十五年十二月一日から三日迄、慶応義塾図書館小閲覧室で創立二十周年記念浜野文庫并近蒐本の展観が行われ、展観書目録が編まれており、文庫長阿部隆一氏が、その経緯と浜野文庫についてとを記している。

浜野知三郎氏の略伝を、前記春日政治氏の筆によって誌しておく。

君名は知三郎（ともさぶろう）、穆軒と号した。広島県福山の人、明治二十九年高等師範学校国語漢文専修科を卒へ、愛媛・徳島・岡山諸県の教職にあつたが、明治四十一年東京に出て専ら著述に従事し、更に大正の初年東京高等師範学校研究科（漢文科専攻）を卒業した後、一時東京市第二中学校教諭であつた。然るに、昭和五年十二月転じて斯文会教育部委員となり、次いで文部省より聖堂管理に関する事を嘱託されたが、同十六年四月辞して大東文化学院理事並に図書課長となつたのに、久しからずして同年十月疾を以て歿した。年七十二であつた。

君の高師に於ける級友としては、大川茂雄・簡野道明・佐村八郎・岩垂憲徳などがあり、又相親んで常に往来した学者には、大槻文彦・森鷗外・大矢透・山田孝雄・岡井慎吾・高野辰之などの諸博士があつた。其の著述に於ては新訳漢和大辞典が初期のものであつたが、これは「浜野の辞書」として明治末年に鳴つたものである。ポケット四書の註釈は初学の為のものであるが、索引の附けられたのが便利な書である。又大正末年には友人佐村八郎の国書解題を改訂し、之に日本叢書目録を補加して世人の便に供した。君が郷土の学者太田全斎の漢呉音図既刊の部に、更に之に関する遺篇を加へて六冊とし、校訂覆刻したことは、亦学者に益する所が多かつた。池田・三村両氏と共撰した日本藝林叢書の如き世に知られたものの他、尚数種の著書が存するのである。

筆者の春日氏また浜野氏に親炙した学者で、そうした縁故から、文字学の岡井慎吾氏・浜野氏の愛顧した古書肆松雲堂野田文之助氏を通し、麻生氏への斡旋仲介を依頼されたのであろ

う。

昭和十六年十一月発行の「書誌学」第十七巻第四号彙報に、「浜野知三郎氏逝く」と題する報文があるので引いておく。長澤規矩也氏の筆か。

会員浜野知三郎氏は嗜眠性脳炎で入院中の処、十月五日午後八時五十七分、遂に逝去せられた。氏は福山藩の人で、明治末葉に已に漢和辞典の編纂を以て世に知られたが、晩年は、大東文化学院、市立中学、斯文会に執務、最近はそれをも辞せられた。蔵書家としても夙に知られ、名家の手沢本など多く蔵せられ、遺書は友人の手で編目せられる由。生平年齢を隠してゐられたが、七十二であつた。

浜野氏には、こうした漢和辞典や、先人の知られざる著作の紹介顕彰校訂編纂等の、地味で縁の下の力持ち的な為事が多い。また本文中にも触れたが、蔵儲資料を私せず、森鷗外兄弟等他の人々への資料提供に吝でなかった。

阿部隆一氏は、前記「創立二十周年記念浜野文庫并近蒐本展観書目録」の「浜野文庫について」に、浜野文庫の特色を次のように識している。

氏の典籍蒐集は上京以来四十年間の努力の結晶で、蔵書家としての令名は夙に都下に知られていた。その一万冊は和漢の古書と明治後の関係学科の学術研究書とが極めて均衡を保って蒐められ、好事家の珍本群ではなく、あくまで学術研究に役立つ実用書であることにその本領が見られる。その構成分野は漢学と国語国文の両面に跨って多彩であるが、氏が特に専門とせる日本漢学関係は頗る網羅充実して出色である。この文庫には所謂貴重書善本と目される図書ほゞ一千五百冊を数え、その中には旧刊本古活字版旧鈔本も架されるが、江戸時代の儒者の自筆稿本・書入本・未刊写本が多い。その圧巻は、江戸後期佐藤一斎と並び称された鴻儒松崎慊堂の自筆稿本・書入本・手鈔本・手沢本等が一堂に会していることで、此は浜野氏が偶然の奇縁から慊堂の子孫から一括購得したものと聞いている。慊堂の稿本はその「慊堂日暦」や雑稿等の一部が静嘉堂文庫に儲されるのみで、それを除いては慊堂の遺書は殆どこの文庫の有に帰していると言ってよい。また慊堂の親友たる狩谷棭斎に出て渋江抽斎等を経て森立之に至る「経籍訪古志」をめぐる幕末校勘学者の自筆本・書入本は特に豊富である。渋江抽斎に始る鷗外の歴史小説の著作に於ては、鷗外は浜野

氏に諮問協力を仰ぐこと頗る多く、特に「北条霞亭」には毎回浜野さんの名が出ていることは読者も記憶されていることであろう。

この文庫の特色は、氏は或る一つの本については徹底的に普く網羅しようと力めたことで、特に四書・孝経に於ては我が国有数のコレクションを成し、名家書入の古辞書類、氏の同郷の先学菅茶山・北条霞亭等の書簡関係書も貴重である。氏の優れた鑑識力は同じ版本でも有用な書入本を選び、また稀覯書の摹写移写にも力を致し、初め氏の臨写本が学者の注目を惹き、その結果その原本が漸く探り出されるに至った例が少なくなく、後学を益すること多大である。浜野氏の郷土藝備とその周辺地域の地誌や先覚に関する書物もまた多い。

例　言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、一aの函架番号が附される五十点を取上げ、略解を加えたものである。なお四八―六一迄は欠番となっている。

一、一aに分類排列されるのは、幕府儒官や江戸後期考証学者の未刊自筆本・手校本又はそれに準じる著作が多い。翻印のあるものは注記したが、それ以外は今日迄全て未刊のものである。なおこれらの著者の書入本・手沢本類は別番号が附されており、それらについても順次略解を加える心算である。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。また著者についても、人名辞書や索引・伝記・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。各専門家の精査を俟つためのもので、本稿がその呼水となれば幸である。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、本略解題は折を見て、随時継続発表の予定である。お気づ

きの点を何なりとお知らせ頂ければ幸甚である。

附記　本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

一a　名家自筆本

飛鳥山十二景詩（序題）　栗原〔柳葦〕（信充）　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・七×一七・四糎）双辺刷枠題簽に「飛鳥山十二景詩栗原信充手録」と書す。天保十一年庚子歳六月二十四日壬午甲斐国源氏栗原信充「飛鳥山十二景詩序」あり、内題なく直ちに本文に接続する。十行廿字、字面高約一九・〇糎。朱句点を附し、まま（序には全文）墨筆の訓点・送仮名を附すが、これは三箇所ほどある墨筆訂正と共に墨色やや薄く、後の加筆かと思われる。胡粉による訂正、また朱筆による訂正が一箇所ずつある。全六丁、原料紙より大きな襯紙が挿挾まれている。原料紙縦約二三・一五糎。

筑波茂陰・秩父遠影・滝野川夕照・梶原村田家・王子新樹（後述の林榴岡詩では「王子深樹」）・平塚落雁・鵠台秋月・染井夜雨・黒髪山残雪・豊島川帰帆・中里晩鐘・西原晴嵐の十二景、七言絶句各三首計三十六首が書かれており、滝野川夕照の第一首は殆ど全面的に書改められている。

序に「享保中、植桜一千株、而展拓其封域、大概数万歩矣、国子祭酒、林公、述詩、以名其境者、即今十二景也、其後、五載、図書府主事、鳴鳳卿、撰文、以立其嶺者、即今銘及序也、……予以林公詩、与鳴氏文、而其詩餘音未尽、故別賦三首、総三十六首、以私補林公之意、且和其韻、云爾、」とあり、本書作成の動機が知られる。安政五年江戸の清音閣蔵板「飛鳥山十二景詩歌并碑」中に、本書序文に云う林榴岡の詩と成嶋錦江の碑文が、田沼主殿頭等名流十二名の題咏和歌と共に収録されている。

室町時代に我国に齎された瀟湘八景を摸して、江戸前期には近江八景が人口に膾炙し、画や詩歌の題材として各地で八景詩〔歌〕が流行するようになった。本書もその類である。

著者の栗原柳葦は屋代弘賢門で、漢学は柴野栗山に学んだ。武家故実の著作が多い。明治三年没、享年七十七。ハ〇九―一

a―一―一

校註韓詩外伝（序題）一〇巻首一巻・校註韓詩外伝逸文（題簽）一巻・校註増韓詩攷（序題）二巻　川目直編　自筆

大一四冊

縹色布目表紙（二六・七×一九・一糎）黄色地貼題簽に「校註韓詩外伝（序跋・小伝・綱領題言目録）（一―十）」「校註韓詩外伝逸文　全」「校註増韓詩攷　上（下）」と書す。弘化四年良月　東奥　安積信撰「校註韓詩外伝序」、弘化三年歳次丙午人日江都友野煥子玉甫序于牛門内新居「校註韓詩外伝序」を冠し、乾隆五十五年端午日序於常州之龍城書院（以下に小字双行にて「○此序載在抱経堂文集巻三揚州画舫録云抱経堂叢書中有荀子韓詩外伝称善本因検舶来数本皆不収外伝」とあり）「校本韓詩外伝序（題下に「抱経堂文集巻三所載」とあるも胡粉にて塗抹さる）」、帰安鹿門茅坤撰「韓詩外伝叙」、銭塘楊祜撰「韓詩外伝序」、済南陳明撰「韓詩外伝叙」、至正十五年龍集乙未秋八月曲江銭惟善序「韓詩外伝序」の各序が集成され、次に嘉靖己亥秋八月望月泉薛来書于芙蓉泉之秋月亭「韓詩外伝後序」、隠湖毛晋識「韓詩外伝跋」、汝上王謨識「韓詩外伝跋」の各跋が集成され、「韓嬰小伝」「韓詩外伝綱領」（諸家説の後に「直案」「又案」等とし、長文の案語を加う）弘化三年歳次丙午正月　川目直子縄甫謹識「校註韓詩外伝題言」「校註韓詩外伝所拠諸本」「韓詩外伝目録」と続く（以上第一冊）。

内題「詩外伝巻之一（―十）／漢　燕人韓嬰　著／日本　江都川目直校註」（内題下に「沈本、之作第、程本、及諸本、作／韓詩外伝巻第一、下皆倣此」と小字双行に記す）。無辺無界十行廿字小字双行、字面高約一九・七糎。藍筆の句点圏点声点を附す。藍墨筆による行間眉上への書入訂補が多い。折目表丁部分に丁附あり。尾題「詩外伝巻之一（―十）終」。第十二冊、天保三年歳次壬辰夏四月　東都　川目直識「韓詩外伝逸文小引」「韓詩外伝逸文目録」に次いで「韓詩外伝逸文／川目直　輯并註」。第十三・十四冊、天保壬辰仲秋川目直子縄甫―題于緑筠晴窓「校註増韓詩攷自序」、王謨輯「漢魏遺書鈔韓詩内伝序録」、浚儀王応麟伯厚甫「詩攷」に次いで、「韓詩攷／宋　王応麟　輯／清　王　謨　補／日本　川目直増并註」と題す。伯厚甫後序を以て終る。各巻頭に「洒竹文庫」朱印あり、大野洒竹旧蔵。各冊丁数以下の如し。六一・三五・四八・五六・三九・三六・三五・三七・四二・三一・三六・二九・三四・三一。

本書は朝鮮刊・元沈辨之校本を底本とし、十七本（同一本の翻刻もあり。中六本未見とす）を以て対校したもので、艮斎序

に「聚諸本校正之、又就群籍所引、参考同異、博証旁援、不窮其源委不措、……其用力亦云勤矣、」と記す通りである。友野霞洲の序にも「潜思十数年而初脱稿、其用力可謂勤矣、」と、期せずして同じ表現がとられているのも強ち阿諛とは云えまい。「韓詩外伝逸文」は諸書を博捜して五十六の逸文を輯め、「校註増韓詩攷」は原本に「通計百二十一条坿益之標増字以別之且略加校註（自序）」えたものである。博覧よく諸説を網羅し、解注また精細である。韓詩外伝の注解は漢土にも少く、その集大成として本書は貴重である。

著者は本書題言に云うところ、幕府の庖吏であり韓非子に精到の聞えあった蒲阪青荘の弟子である。没年未詳。ハ〇九―一a―二―一四

刻語由述志跋　渋沢栄一　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・七×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「刻語由述志跋渋沢栄一書」と書す。内題「刻語由述志跋」。左右双辺（一八・八×一三・一糎）有界九行白口墨書罫紙使用。末に「大正八年八月／渋沢栄一識印」。二箇所ある南冥の冥字を、始めウ冠に作り紙を貼って訂正してある。本文二丁、首に本書の影印二丁を添える。料紙より大きな襯紙に貼附さる。原料紙縦約二四・九糎。

本書は大正十一年九月の年紀ある「刻語由述志跋」（影印本「語由述志」巻末に活字翻印）と少異あり、また論語は本文庫蒐書の一つの柱であり、亀井南冥昭陽も本文庫と浅からぬ関係があるので、繁を厭わず全文をここに掲げておく。本書には濁点・句読点はないが活字翻印本には附されている。括弧内に注記したのは活字翻印本との校異である。今新旧の字体の差は挙げない。

刻語由述志跋

方今我邦文運隆昌ニシテ国威拡張（国力振興）スト雖モ而モ世界大勢ノ推移ニヨリテ人心漸ク質実ヲ欠クノ虞アルハ識者ノ等シク憂慮スル所タリ余夙ニ論語ヲ以テ処世ノ指針トシ曾テ道徳経済合一ノ説アリ又論語算盤併用ノ事ヲ主張シ私ニ謂ヘラク唯（唯なし）孔夫子ノ聖訓穏健着実以テ能ク当世ノ弊ヲ救フ可シト是ヲ以テ曩ニ南冥亀井先生撰述ノ論語語由ヲ印行（覆刻）シテ之ヲ友人ニ頒テリ今（後）又語由述志ヲ刊行ス（セントス。蓋シ）語由述志ハ南冥ノ嗣子昭陽先生ノ著ハス所能ク家学ヲ継紹シテ之ヲ大成セル者ナリ且ツ此原本ハ著者ノ親シク手書スル（セル）所ニシテ

実ニ其定本タリ依テ亦玻璃板ニ附シテ（依テ亦西東書房ニ命ジテ写真版ニ附シタリシガ、工殆ド竣ルニ及ビテ、大正九年七月書房火アリ、刊本悉ク灰トナル。原本ハ纔ニ災ヲ免レタレドモ、其第三一巻ハ燼餘ヲ得タルニ過ギズ、先生手沢ノ原本為ニ疵瑕ヲ生ジタルハ、洵ニ痛惜ニ堪ヘズ。幸ニ内閣文庫ニ、先生ノ門人長川録トイヘル人ノ天保壬辰十月原本ニ就キテ手抄セル一本ヲ蔵ス、乃チ借リ写シテ之ヲ補足シ、重ネテ刊行シテ）之ヲ同好ノ士ニ頒ツ若シ夫レ聊カ（カなし）ニテモ学界ニ貢献シ世道人心ニ裨補スル所アラハ余ノ本懐何物カ之ニ加ヘン

大正八年八月（大正十一年九月）

渋沢栄一識

（翻印本では署名は年紀の下に一行で記さる）

また影印版「語由述志」には送呈の辞一葉が附されているので、参考のため以下に掲出する。

拝啓時下益御清適奉賀候然は語由述志之書は九州の碩学亀井昭陽先生の遺著にして坊間見受けざるの書物に候処今般安川敬一郎氏の御好誼に依り同氏の珍蔵せる先生手稿の原本を以て写真版に附し副本を製し候に付一部別封を以て拝送仕候間御清閑の折御一読被下候はゞ本懐の至に御座候右得貴意度如此御座候　敬具

大正十一年十一月　　渋沢栄一

この底本となった安川敬一郎氏蔵本は、昭和三十四年他の亀井家学書と一所に本文庫に寄贈された。奇しくもここに、燼餘の影印原本とその刊行者の自筆跋文とが再び相会することとなった。

渋沢栄一（昭和六年没、享年九十二）の膨大な資料は、渋沢青淵記念財団龍門社とその下部組織である西ヶ原の渋沢史料館で蒐集整理保存され、一部が展示されている。青淵論語文庫と本文庫との関係や、それが当時の日比谷図書館（現都立中央図書館）に入蔵した経緯については、既にいささか触れたことがあるので省略に従う。ハ〇九―一a―三―一

〔七雅〕序　楙原心斎（直養）等　写　大一冊

後補黄土色表紙（二六・二×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「序心斎先生自序外三篇」と書す。「自序（末に「嘉永紀元之夏、心斎―斉の下の小は朱筆にて加う―楙原直養題、」とあり）」「叙（巻末に「嘉永戊申秋日、襄松松崎純倹撰、」とあり）」「戚雅序（末に「弘化三年龍集柔兆敦牂上元前一日／僚友佐藤坦撰」とあ

り）」以上双辺（一七・三五×一二・六五糎）有界九行白口、下象鼻に「心斎」と刻する墨刷罫紙使用。次に「数雅序（序題直下に「見山楼」朱印、下部に「緑静堂／図書章」―心斎の堂号―押捺、末に「天保甲午陬月東奥安積信撰印印／北総千阪畿書／印印」とあり）」此は左右双辺（一七・一×一二・七糎）有界十行白口墨刷罫紙に書かれている。本罫紙は裏丁匡郭外下端に「清暉楼鈔本」と刻されている。直養序には墨筆句点、純倹序には朱筆の句点が加えられ、自序には入紙、一斎序には虫損補修が為され、他は次に述べる岡本況斎の文と共に、全て襯紙に貼附されている。序各二丁。

此等の序の後に岡本保孝の記せる一葉が加えられている。今全文をここに掲げる。

戚雅ハ別テ御力ヲ竭サレタルヨシ安積氏ノ序ニコレアレハ弥以シヒテ僻説ヲシルシテ呈スル也取捨ハ賢断ニアリ　岡孝拝（以上朱書）

佐藤氏序

此之不辨至而可乎　刪去スベシ衣服ハ身ニ切近ノモノナレトモ其名目一々シラテモ君子也賢人也大夫也士也称謂豈コレニヒスヘキヤ試ニ問フ佐藤氏ハ人ミナ宿儒ト称スレトモ公私ノ服ノ名目ヲ我コレヲ詰問セハ十ニ七八ハ彼必ス窮スベシサレト儒者ハ儒者ニテ天下ニ横行スル也称謂ハ一タヒアヤマレハ天下乱矣豈コレニヒスヘキヤ且此十数字刪リテ文脉ニモ害ハナシ

安積氏序

孔鮒小尓雅

今日文運ヒラケテ尚昼孔伝ヲ偽書トシルカラハミナコレヲ孔伝トイハス某氏トイヒ偽孔伝ナドイフ也コノ類ニテ小尓雅ハ孔鮒ノ作ニアラスサレハ某氏小尓雅トモ改ムヘキ歟安積氏ハ四庫全書ヲハ不見ヤ

況斎の面目躍如たるものがある。此箇所は一斎序にはそのまま残るが、艮斎序には見られない。しかし国会図書館蔵、心斎自筆の「戚雅」二〇巻子目三巻の、弘化二年秋七月　東奥安積信撰「戚雅序」に見られ、況斎も「戚雅ハ」と書いているので、本書には佚しているが、恐らくそれを指すのであろう。

杉原心斎は佐藤一斎・安積艮斎門の幕府の儒官で、岡本況斎と親交があった。明治元年没、享年未詳。

本書は「惟聞見所及、不択雅俗、輒筆録之、以弃于篋笥、已有年矣、甲午之春、試鈔出分類、釐為七部、曰戚雅、曰数雅、

曰彩雅、曰名雅、曰容雅、曰歳雅、曰霊雅、都命曰緑静堂全雅、而後稍加詮正、次第成編、而容雅以下稿未及脱、」と自序に述べ、以下に略解を加える七雅の序文を採り輯め、一書としたものであろう。ハ〇九―一a―四―一

戚雅　小序十七首　〔杉原〕心斎　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二五・九×一八・六糎）双辺刷枠題簽に「戚雅」と書す。心斎罫紙の反故裏左肩に「戚雅小序　十七首」と書し扉とす。巻頭「戚雅巻一／釈上祖第一」と題し、小序本文は二格下げて記す。双辺（一七・八五×一二・六糎）有界九行白口、下象鼻に「心斎」と刻せる墨刷罫紙使用。行廿四字、本文低二格。朱訂・墨筆訂正書入、切貼にての訂字、押紙等あり。襯紙が挿挾まる。本文全十丁。

釈高祖行・釈曽祖行・釈祖父行・釈父母行・釈兄弟行・釈子姪行・釈孫行・釈曽孫行・釈玄孫行・釈雲仍・釈母党・釈夫党・釈妻党・釈昏姻・釈皇属・釈雑称（以上第二より第十七）その後に釈夫婦（第六―始め第九と書き其上を六と直すか）・釈父母行（前記の訂正通りに書かれたものを更に朱訂している）・釈兄弟（始め釈夫婦とありしを改む。前記と異るも、釈夫婦の後に追込んで書かれてあるものと符合す）・釈夫婦（「詩集伝目録」と題書せる罫紙の反古裏を使用。前記と小異あり、改稿ならむ。前記釈夫婦の裏丁に釈夫婦と釈兄弟の改稿せしものが記され、それとは符合す）の夫々に、詩経の小序に倣ったそれが物されている。某雅とは爾雅より出でて其体に仿った訓詁小学の書を云う。ハ〇九―一a―五―一

〔戚雅〕　杉原心斎（直養）　自筆　大一冊

後補渋引茶色表紙（二七・五×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「戚雅」と書す。本文内題を欠き釈祖父行第四の途中より始まる。前出心斎と刻する白口双辺罫紙の反古裏を使用し、切貼・訂正・眉上への書入等多し。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。まま句点を施す。杉原直養編纂「戚雅補遺」を附す。補遺共十二丁。

釈父母行第五上（下）・釈夫婦第六・釈兄弟行第七・釈子姪行第八・釈孫行第九・釈母党第十三・釈夫党第十四・釈妻党第十五・釈昏姻第十六・釈雑称第十八上を存す。戚すなわち親族に関する語彙を輯めたものであろう。清の銭大昕撰「恒言録」より引く所が多い。

国会図書館に、自筆二〇巻子目三巻の完備せる稿本が存する。此は各巻小序を冠せて本文に接続している。

本書以下の心斎著作は全て諸書を引き、其後に「○直養按」等として按語を記す同体裁の編述法をとっている。ハ〇九—一a—六—一

彩雅子目　杉原心斎（直反）　自筆　半一冊

後補渋引茶色表紙（二四・三×一六・八五糎）双辺刷枠題簽に「彩雅」と書す。天保八年歳次強圉作噩観蓮節杉原直反記「彩雅凡例」に続いて「彩雅子目／巻之一（—十）」とあり。同前罫紙使用。訂字は切貼によるものもあり、凡例には朱訂が施されている。

巻一—釈青一　ハナイロ　釈青二　ソライロ　釈青三　コン　巻二—釈緑一　トクサイロ　釈緑二　モヘキ　釈緑三　ウクヒスチヤ　釈緑四　マツバイロ　釈緑五　アイヒロウド　巻三—釈赤一　クレナヒ　釈赤二　ベニカバ　釈赤三　スヽタケ　釈赤四　クリカワ　巻四—釈紅一　モヽイロ　釈紅二　桃花色　モヽイロ朱　トキイロ　釈紅三　大和ガキ　巻五—釈黄一　ウコン　釈黄二　ウスタマコ　釈黄三　カハイロ　釈黄四　キカラチヤ　釈黄五　丁子チヤ　巻六—釈留黄一　コヒチヤ　釈留黄二　コケチヤ　釈留黄三　チサイチヤ　巻七—釈白一　釈白二　釈白三　シロ子ツミ　釈白四　シロチヤ　巻八—釈碧一　アサギ　釈碧二　アイ子ヅミ　釈碧三　ドブ子ヅミ　巻九—釈黒一　クロ　釈黒二　コンビロウド　釈黒三　子ヅミイロ　巻十—釈紫一　ムラサキ　釈紫二　ブンイロ（ママ）　釈紫三　トヒイロ　釈紫四　ウスフジイロ　釈紫五　フジ子ヅミの各項に亘り、「十一巻以後彩雅之支流末裔……今略加釐定為五巻通前計十五巻名曰彩雅余窃謂方今文明典籍浩富如竹譜香乗酒史銭録之比莫有不備唯彩色独未有専書」と自ら凡例に記す如く、未だ専書のなかった色名に関する語彙を諸書から輯録せんと試みたものである。子目のみで三十丁を数える集大成で、本文の存しないのがまことに惜しまれるが、幸国会図書館に、一五巻子目二部を附す自筆本が存し、子目の一には糸を染めた色見本が、上小口に添附されている。現今色名に関する専著も漸く現われるに至ったが、著者の先見の明はそれによっても毫も消え去るものではない。

直反は初名で、後直養と改められたらしく、後掲「数雅」の初稿本には、始め「直反按」とあり、後朱筆で「直養按」と書入られ、改められている箇所が見える。ハ〇九—一a—七—一

容雅六巻　杉原心斎（直養）　自筆版下稿カ　大二冊

後補茶色表紙（二七・五×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「容雅上（下）」と書す。巻頭「容雅巻第一（—六）／杉原直養編纂」

と題署し、次に小題「釈拝容上（下）」等とあり。同前罫紙使用、行廿字、諸書からの引文等小字双行低二格。訂字のない浄書本であるが、一部書きさしの箇所もあり、未完成のようである。虫損補修さる。上冊四二、下冊三三丁。

釈揖容・釈手容・釈坐容・釈跪容等態度・立居振舞等に関わる語彙を輯む。ハ〇九—一a—八—二

数雅　巻第一釈数目　杉原〔心斎〕（直養）　自筆　初稿本　大一冊

後補黄土色表紙（二五・九×一八・六糎）双辺刷枠題簽に「数雅釈数目」と書す。巻頭「数雅巻第一／杉原直養編纂（朱書）」と題署し、次行に「釈数目（目朱書）」と小題を記す。左右双辺（一七・一×一二・七糎）有界十行白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。本罫紙は裏丁匡郭外下端に「清暉楼鈔本」と刻する前掲〔七雅〕序の安積艮斎序使用のものと同一である。料紙は襯紙に貼附さる。原料紙縦約二四・一糎。眉上等に朱墨の書入多く、押紙も附されている。ま ま朱墨句点あり。全六丁。

数字の一から始まり、小億・大億迄を収める。ハ〇九—一a—九—一

数雅　巻第一釈数目　杉原心斎（直養）　写　版下稿ノ自筆訂正本カ　大一冊

後補渋引茶色表紙（二七・四×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「数雅釈数目」と書す。巻頭「数雅巻第一／杉原直養編纂」と題署し、次行に「釈数目」と小題を記す。双辺（一七・七×一二・七糎）有界九行、下象鼻に「心斎」と刻する白口墨刷罫紙使用。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。全九丁中、後三丁は罫紙の反古裏使用、句点（後二丁は朱筆）・朱墨訂字・切貼訂正等あり。前掲書を浄書した版下用稿本に尚訂正を加えたものの如し。

本書は小億・大億の次に「十等三焉」「洛叉　倶胝　阿庾多那由他　阿僧祇」「大数　小数」「五数」の各項がある。尚第四丁と第五丁の間は、九から億の途中に飛んでおり、恐らく欠落があるかと思われる。ハ〇九—一a—一〇—一

数雅　巻第十四・十五釈雑数　杉原心斎（直養）　写　版下稿ノ自筆訂正本カ　大二冊

後補黄土色表紙（二七・四五×一八・五糎）第二冊同渋引茶色表紙（二七・四五×一八・四糎）双辺刷枠題簽に「数雅釈雑数上（下）」と書す。巻頭「数雅巻第十四（十五）／杉原直養編纂」

と題署し、次行に「釈雑数上(下)」と小題を記す。上冊は同前罫紙使用、行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。下冊は同前罫紙の反古裏を使用し、「数雅巻第九／杉原直養編纂／釈器用」等の題署が見られる。朱墨訂字・切貼訂正多く、そうした切貼の挿入部分を、補修時に直に襯紙に貼附したと見られる葉も存する。上冊は他筆の版下書を手訂せしもののようで、下冊も元は恐くそうした体裁であったのであろうが、訂正部分が多く殆ど改められてしまったものの如くである。朱墨両様の句点訂正が施され、切貼による改定も多い。尚下冊には単辺有界十行白口単黒魚尾罫紙の反古裏に書かれた「釈雑数下」という小題（恐く元表紙ならむ）が扉の如くに綴じられてある。上冊十五、下冊十四丁。

国会図書館に一部他筆の混じるものの、一五巻の完備せる稿本が存する。ハ〇九—一a—一一—二

名雅子目　〔杉原〕心斎　自筆　大一冊

後補渋引表紙（二七・四×一八・五糎）双辺刷枠題簽に「名雅総目」と書す。「名雅総目」あり、次に「名雅子目／巻第一／釈姓」と記す。双辺（一七・四×一二・七糎）有界九行、下象鼻に「心斎」と刻する墨刷罫紙使用。四箇所ほど貼紙で編成替えの指示が施されている。全十七丁。

本書も彩雅と同じく子目のみが存する。その編成は十三巻で、巻二より釈名・釈字・釈双・釈同・釈諱・釈禁・釈截・釈更・釈号・釈謚・釈古・釈雑の各項目を、各々一巻ずつに宛てている。

本書も亦、国会図書館に一部自筆を含む清書本一三巻が存する。ハ〇九—一a—一二—一

〔霊雅〕附録　〔杉原〕心斎　写（一部自筆）　大一冊

後補黄土色表紙（二六・八×一八・六糎）双辺刷枠題簽に「杉原心斎先生遺著」と書す。巻頭ただ「附録」と題するのみにして直に項目名の「祆神」と書す。双辺有界九行、下象鼻に「心斎」と刻する白口墨刷罫紙を使用するも、切貼多く料紙を切継いでいるため計測不能。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。朱墨両様の句点訂字・朱引あり、切貼多し。全八丁、襯紙に貼附さる。原料紙縦約二四・九糎。

張天師・仏・観音像・歓喜仏の祆神を含めた五項目から成り、何という書の附録か明かでないが、国会図書館蔵「霊雅」一七巻の、一部他筆を混じる稿本を見るに、巻一五「釈人鬼褒崇」の附録部分であることが判明する。ハ〇九—一a—一三—一

書名討原　〔杉原〕心斎　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二七・〇×一八・六糎）双辺刷枠題簽に「書名討原」と書す。巻頭「書名討原」と題する。双辺（一七・三五×一二・七五糎）有界九行、下象鼻に「心斎」と刻する白口墨刷罫紙使用。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低三格。朱句点・朱引・朱墨訂字・切貼訂正等あり。全三丁。

五経正義・夷堅志・酉陽雑俎・続斉諧記・虞初志　虞初続志　虞初新志・説郛・百川学海・笑林・侯鯖録　五侯鯖・三餘贅筆・詒痴符・津逮秘書・五車韻瑞・説鈴・丹鉛録・瀛奎律髓・譚苑醍醐の各書名の因ってきたる所を、解題書のみならず諸書から捜っている。ハ〇九―一a―一四―一

莫須篇　経史綱領・六書名義・詩文一斑　杉原心斎（直養）　自筆版下稿カ　大三冊

後補黄土色表紙（二七・五×一八・四糎）双辺刷枠題簽に「莫須篇経史綱領」と書す。同第二冊（二六・八×一八・六糎）「莫須篇六書名義」同第三冊（二六・八×一八・五糎）「莫須篇時文一斑」。巻頭「莫須篇巻第一／杉原直養編纂／経史綱領第一」第二・三冊「莫須篇巻第／杉原直養編纂／六書名義（詩文一斑）」と題署す。双辺（一七・七×一二・五五糎）有界九行、下象鼻に「心斎」と刻する白口墨刷罫紙使用。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。第一冊廿一丁。第二冊六書名義に綴じられた後半三丁は音韻に関するもので、前半五丁と書式やや異り、襯紙に貼附され（原料紙縦約二五・一糎）、朱句点・朱引が施されている。第三冊全十三丁は襯紙に貼附されている。原料紙縦約二四・九糎。

経史綱領は五経・六経・六藝・六籍等の、諸書からの輯説に始まり、後半の十一丁半ほどは十三経注疏目録の解説となっている。書名は莫須有の語からとるか。版下書のようであるが、尚未成の如くである。ハ〇九―一a―一五―三

〔莫須篇　詩文一斑〕断簡　〔杉原〕心斎　自筆　初稿

本　半一冊

後補黄土色表紙（二四・二五×一六・七糎）双辺刷枠題簽に「杉原心斎先生稿本」と書す。内題なく途中より始まり「三之字畳用」の項が見える。すなわち前掲書の詩文一斑の第九丁からの断簡である。前掲罫紙使用。行廿四字、諸書からの引文等小字双行低二格。朱句点を施す。切貼・増補の書入・朱訂等あり、前掲書では此訂正通りに書写されている。全四丁。後半二丁入紙を施す。

先に述べた項目に続いて、聯句・集句詩文・集字刻石・無韻

者謂之筆　有韻者謂之文或謂之詩の諸条が存する。

杉原心斎の自筆稿本類は、上述の如く国会図書館と本文庫とに分蔵され、互に相補い、比較することによって稿次を推定することが可能となるものも多い。因みに国会図書館への入蔵は、大正九年七月十日購求の印があるからその頃であろう。ハ〇九—一a—一六—一

秋虫考　〔岡田〕寒泉（恕）　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・一五×一七・七糎）題簽に「秋虫考　岡田寒泉著　完」と書す。巻頭「秋虫考」と題す。双辺（一九・二×一三・六五糎）有界十一行白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用。行廿一字。朱句点を附す。胡粉塗抹訂正・朱訂等あり。本文末に「寒泉恕　著」と記し、その後に「寒泉攷」と署する「莎雞絡緯紡績虫之辨」一丁を附す。料紙は原料紙（縦約二四・一糎）より大きな襖紙に裏打されている。全六丁。

竈馬・促織・起理起理須・武磨於伊・図田武之・蟲蝨・蝗・麻蚱（久都倭武之を胡粉にて塗抹し眉上に記す）・金鐘児・紡績娘・加禰多々幾・知夜多天武之（眉上に朱筆にて「窃虫」と記す）・叩頭虫の各虫について、本草・小学・随筆類を引いての考証である。本文末に「附参」として「辯万豆武之須須武之之誤」を附す。

岡田寒泉は崎門の村士玉水門、幕府の儒官で、後代官としてすこぶる治績ありと。文化十三年没、享年七十七。ハ〇九—一a—一七—一

酔月楼餘稿四巻（巻一作三巻）　高岡養拙（秀成）　自筆カ

半六冊

黄土色表紙（二三・三×一六・三糎）左肩に直に「酔月楼餘稿巻上（巻中・巻下・巻二・巻三・巻四）」と朱書す。巻上（中・下）の右傍に、何れも「初巻」と墨書あり。また各冊右肩には朱筆にて「五言古七言古五言律」「七言律」「五言絶句七言絶句」「説類銘賛類題跋／論辨類」「書牘類雑文類」「雑文類」と記す。文化九年壬申首夏下浣　浚進松則武譔「叙」（題下に「孝山／書屋」「掃葉山／房臧書」「養拙斎」の朱印三顆押捺）文化壬申初夏之日鄙甥小島直裕謹撰〔序〕を冠す。巻頭「酔月楼餘稿巻上（中・下・二—四）／江戸　高岡秀成実甫著」と題署す。巻頭内題下にも「養拙斎」朱印を鈐する。単辺（一九・六五×一三・四五糎）有界九行白口双黒魚尾の墨刷罫紙使用。行廿字。朱筆の句点校字・朱引、まま朱圏点を附す。眉上行間に墨筆にての訂正、胡粉・切貼による訂正あり。第三冊末に「壬申暮春、養拙老人

高岡秀成（上記四字に朱引あり）自跋并書于酔月楼中囘囘」と署せる跋あり。全巻裏打修補さる。「馬琴翁が、燕石雑志、巻の一（十三葉右、〇第四則、丙午の条）に曰、」等と誌した小紙四葉が挾込まる。詩文の体式類目の変り目では、表丁版心部上層を朱で塗って標識としている。各冊の丁数を記せば、廿・廿七・卅三・廿三・廿・廿丁。

本書は直裕序に「其壮年詩文十年以前既彙成十巻……今茲壬申子敬輯録其詩為三巻」とあり、自跋に「余従少年好読書学文、長而服勤世業、身無餘暇、……壮歳之作、既彙成冊、頃者児輩輯録、従艾到耆之討成三巻蔵于家、」と記す如く、還暦を迎えて五十代の詩作を息男が三巻に取纒めたものに、文集三巻を彙編して合したものであろう。文集にも同時期の享和二年より、文化八年迄の年紀が見える。

高岡養拙は商を以て官に仕え、また帷を下して教授した。文政七年没、享年七十二。ハ〇九―一a―一八―六

西巌翁遺稿叙　斎藤〔拙堂〕（正謙）　自筆カ　大一冊

褐色表紙（二四・六×一七・四糎）双辺刷枠題簽に「西巌遺稿叙」と書す。巻頭「西巌翁遺稿叙」と題し、巻末に「天保庚子桂花月　津藩　斎藤正謙撰」と署す。左右双辺（一七・三×一二・〇糎）有界十行、下象鼻に「古香書屋」と刻する拙堂の白口双黒魚尾墨刷罫紙使用。行廿字。朱句点を附す。二字ほど胡粉で塗抹し字が訂されている。襯紙挿挾まる。原料紙縦約二四・一糎。全二丁。末に大正七年戊午六月十七日の竹清主人識す購得識語あり、「此文和集所載白玉詩集序即是」と書かれている。反古二葉が挾込まるるも、拙堂のものや否や、寧ろ竹清主人三村清三郎に関わるか。

西巌大槻氏、平泉の兄、西磐の父、「独在郷里、守父祖遺業、好学兼通和漢、襲為郡正、」と本文中に記されている。なお叙して「其子瑞卿游江都、毎従余商量文辞、一日持翁遺艸属余曰、是亡父心血所注、欲伝示後昆、願子序之、……今此集未有名、人迷称呼、唐詩又不云乎、白玉仙台古、余乃欲以白玉名之、夫既以仙台命其地、今又以白玉命此集、地之霊人之傑皆挙之矣、誰謂不可也、」と。文政八年没、享年六十。

拙堂は津藩儒。慶応元年没、享年六十九。尚竹清は明治三十五年より十年餘津に住む。ハ〇九―一a―一九―一（追記一）

石室談草（序題）三巻　中川石室（顕允）　自筆　半三冊

表紙は雲母引地に縹色にて波型文様を描く（二〇・九×一五・五糎）。双辺刷枠題簽に「談草　上（中・下）」と書す。

扉朱書「談草　巻上（中・下）」巻中・下は表紙見返に貼附される。文化六年己巳四月下浣　石室中川顕允漫昼「石室談草附言六則」（「附言六」は始め「凡例五」とありしを朱訂）「石室談草目録」を冠す。本文巻頭内題なく「徳行」と小題して直に本文に入る。無辺無界十一行、小字双行。字面高約一八・一糎。眉上書入・押紙・朱墨訂正・墨線による抹消等あり、一部朱句点また僅かに墨筆句点が施さる。

天地が裁断され、一部書入れの切れている所がある。附言六則の上層に「石室／図書」の朱印を捺す。各四七・四四・四四丁。

本書は附言六則に自ら云う如く「諸先生ノ記載セシ昼及ヒ見聞セシ一二ノ物語ドモヲ歴采シ此ニ宋ノ刘氏世説ノ篇目ヲ仮リテ一種ノ佳味ニ志シタル者」である。「此昼ニカラヲ指テ西蕃トシ夷狄ノアシラヒニス此支昔ヨリアリ我ヨリ始ルニハアラズ支ハ塩嚢抄巻十ノ四ニ見ヘタリ」ともある。

篇目を世説に倣い、徳行・言語・政事・文学・方正・雅量・識鑒（以上巻上）賞誉・品藻・規箴・捷悟・夙恵・豪爽・容止・自新・企羨・傷逝・棲逸・賢媛（以上巻中）術解・巧藝・寵礼・任誕・簡傲・排調・軽詆・仮譎・黜免・倹嗇・汰侈・忿狷・讒険・尤悔・紕漏・惑溺・仇隙の卅六項目に亘り、為政者・儒家・諸家の逸話が輯められている。試みにその幾つかを掲げておく。

京都ニテ乞食ノ哥トテ聞ヘシハヘヌルマノミ人ニカハラヌ思ヒ出ニ浮世ニカヘル暁ノ鐘　是レモ本ハ故アル人ノ世ヲ遁レテカ、ルアリサマヲセシナルベシ

近キ比川原者ニ市川白猿トイヘル者世ヲ遁ルトテ一首ヲヨメリヘ惜マル、時チリテコソ世ノ中ノ花モ花ナレ花モ花ナレ白猿ノ鼻高シ因テ花鼻カヨハシイヘリ（以上棲逸）

東都ニ火災ノ多キヿハイカナル故カト鳩巣室氏ノ考ニハ東都ニ水道多キヨリシテ地脉ヲ絶ツノ理ニテカアラン近キ世肥前ノ長崎ニ初テ水道ヲ作リシ時西土ノ人見テ是ヨリ火災起ルベシトイヒシ類ニテ推サル鳩渓平賀氏ハ富士山ニアタリシ風ノ吹廻シニテ東都ニハ大風多シモシ富士山ヲ低セバ自然ト東都ノ火災少ナカルベシト考ヘラル、由是ヲ要スルニ二策迂遠ノ妄談ロニハ語リ筆ニハ記ストモ実用ニハ施シ難キヿナリ（術解）

嘗テ余レ昔陽先生ノ間居ニ侍セシ日師ニ問テ曰ク近来東都ニ伊勢ノ本居氏著ス所古支記伝詞ノ玉緒等ノ昼世上ニ流

布シ是ヨリシテ本居氏ノ名隆々トシテ起ル凡ソ国朝ノ上古ニ志ヲ深フスル者ミナ善ニ服セザルハナシ其学風ノ如キハ師ニ於テヤ是ヲ何トカ思召ゾ先生曰ク嗚呼ヨイ哉小子ノ問ヤ道同シカラザレハ相トモニ謀ラズトハアレトモ我モシ言ズハ弟子ノ惑ヒ益甚シカラン我本居氏ノ昼ヲ見ルニ彼ガ言ニ我道ハ孔子等ガイヘル道ニモアラズ亦老荘等ガ道ニモアラズ亦釈氏等ノ道ニモアラズトイヘリ然レバ此衆ノ道トスル所トハ異ナリサテ本居ハ天地万物ハ天ヨリ出テ、高皇産灵尊ノ御魂ヨリイロ〳〵ノ物ナリ出タリトイヘルヿ甚不審ナリソノ故ハ当時　県官ヨリ御法度ノ天主教トイヘル物ハ其法天主トイヘル者天ニアリテ造物ヲナシ玉ヘルト立ルヿノ由今世上ニ天主教ハ制禁ユヘニ敢テ知ル者ナシ本居氏ハ多智ニシテ窃カニ此説ヲ名ヲ換テ道トセシモノナリ我密カニ汝ニ告ク故必ス他言スルヿナカレマタ上世ニ兄弟夫婦トナルヿアリソレモ同母兄弟ハアシ、トイヘトモ異母兄弟ハヨロシキ由人ニ語レリト聞ケリ此一言ハ甚タ教ノ道ノ害ニナルヿナリ是ヲ要スルニ大御国古昼ノスマシ難キヿハ本居ノ鮮釈分明実ニ詳悉ナレバヨリ用ユベキモノナリ其卓識ノ如キハ必ス彼説ニ惑フヿナカレ且序ニ汝ヲ戒ムヿアリ汝ガ記憶ハ我カ門人中ニ卓絶シテ珍シキ人ナリ惜イ哉汝雑駁ヲ好デ経昼ヲバユルカセニスルナリ自今ハ経学ヲ第一トイタシ雑昼ヲバ其次トスベシト終リニハ師ノ一喝ニ拝稽顙シテ罷リ出タルナリ嗚呼先生ハ千古ノ人トナリ玉ヒ小子ハ未タ雑駁ノ癖不レ止悲ヒ哉

ムカシ宇都宮遯菴毛利貞斎等ノ大儒多ク頭昼ノ本ヲ著述イタサレケレバ世ニソレヲシラミ学者ト刺リタリシト今世芸閣千葉氏モ亦シラミズキノ癖アルナリ（以上軽詆）

水島卜也桂秋斎ハ己ガ偽造ノ故実者ナリケリ（仮譎）

出典を誌さぬのが惜しまれるが、当時は物の本を除けば、それが一般であった。

上記引用部分にも見られるように、著者は熊本藩儒古屋昔陽門。文中に「余嘗テ東都ニアリシ日」等ともある。無窮会神習文庫架蔵の「国体考」には、「石室中川先生箸書目」と題し、「石見外記　四冊／文政中松平冠山侯（因州鳥取支藩長門守定常君）御取扱ヲ以／昌平岡之御文庫ニ納ル（内閣文庫現蔵）／石室談草　三冊／清恭公御代摸写入内文庫／野中松　一冊／国体考　一冊」と見え、裏丁に「明治三庚午年九月吉旦　侍史小川武左衛門雅文謹書」の略伝が記されている。それによると、石室は石州藩士にして

小篠道冲門、寛政四年五月居を江戸に移し、江戸藩邸で子弟に素読指南を為したが、享和元年婦人が狂を発し、医薬験無く、職を辞して石州に帰った。術を尽すも効なく、家は破れ、冬に布衾の厚き無く、夏に麻帷の羅無しという有様であったが、少隙にも書を看て倦むことを知らず、また婦人の看病に務めた。婦人の没後は、児を懐にして近傍の家に乳を乞い、撫育したと云う。文化十四年四月近臣に擢用され、再び居を江戸に移した。天保四年病に就き再び起たず、七十歳にして十一月五日黄泉に帰した。息は学を好まず、中年にして没し、其子は幼弱狂病を得て没し、養子が家を継いだが、家産殆ど敗れて今に一巻の書も止めず、皆散失せしと。ハ〇九—一a—二〇—三

枕山随筆（外題）　〔大沼〕枕山　自筆　半五冊

茶褐色表紙（二二・五×一五・五糎）に直に「六冊之内／枕山随筆」と書す。第二冊上記せし左に「詩稿　全」とあり。「枕山／書房」「枕山」「山／窓」の朱印を鈐す。裏表紙に「全六冊／枕山翁之形見　山窓（署名の下に朱印「山／窓」を捺す）」等と記す。表紙・裏表紙・書扉等は反古紙が使わる。各冊巻頭は以下の如し。第一冊「壬寅／元日書懐」と題して本文に入る。元日書懐の下に「枕山」眉上に「枕山／書房」の朱印が鈐せらる。第二冊「甲辰稿下」第三冊「丙午稿」第四冊「辛亥除夜」の詩に始まり、途中「壬子」と朱書あり。第五冊「初秋夜作」の詩に始まり、途中「辛丑八九月之交」「戊申元日」等の語が見える。第一・二・四冊左右双辺（一七・〇×一二・〇糎）有界十行白口単黒魚尾藍刷罫紙使用。行十六字。第三・五冊左右双辺（一七・四×一二・〇糎）有界十行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。同じく行十六字。朱墨の訂正・切貼による改稿多く、まま朱筆の句点圏点を施す。切貼箇所は一部糊のはがれた所がある。眉上に〇□△等の符合を記すは、恐らく詩集編纂の取捨のためのものならむ。第一冊は末に三丁ほど無罫の半紙に書かれたるを綴ず。廿三丁。第二冊の末二丁は和文、廿七丁。第三冊廿四丁。第四冊も無罫半紙に書かれたるあり、後半は反古帖の如し、全卅四丁。第五冊も、同じく無罫半紙また第一冊使用の罫紙も一丁あり、巻末は反古に似たり。全卅六丁。修補に際し挿入されていた反古等を襯紙に貼附した箇所がある。

外題に云う随筆は、現今のエセイや考証随筆の意でなく、筆に従って筆にまかせて記したものの意であろう。元六冊あり一冊を佚したらしい。第一冊は壬寅天保十三年のもので、巻末に「以上通計一百二十首」と記し、「枕山」朱印（各冊巻末にあ

り）を鈐する。第二冊甲辰弘化一年、第三冊丙午弘化三年の稿であるが、末に己酉中秋乃ち嘉永二年の詩も存する。第四冊辛亥・壬子嘉永四・五年、第五冊は年次を題さぬが、本文に徴するに辛丑天保十二・戊申嘉永一等の紀年が見える。添削の痕の多い詩文稿。

著者は詩を以て聞えた。明治廿四年没、享年七十四。近時福生市郷土資料室で、特別企画展「漢詩人・大沼枕山―俳人友昇をめぐる人々―」次いで「漢詩人大沼枕山の世界―十九世紀後半の江戸詩壇―」が開かれ、関係者の努力によって「大沼枕山来簡集」が編刊されている。旧蔵者山窓は今詳かにしない。ハ〇九―一a―二一―五

えり衣附の㋝㋷字音はぬる韻のかなの事　釈義門　自筆カ

半一冊

後補朱色表紙（二四・三五×一六・二糎）双辺刷枠題簽「男信補遺稿僧義門自筆」と書す。扉「義門大徳自筆／男信補遺稿」と書し、「烝渚吟刖／珍蔵之記」の朱印を鈐する。巻頭「えり衣附の㋝㋷字音はぬる韻のかなの事」と題す。下部題書の上に前述の朱印を捺す（巻末にも此印あり）。無辺無界十又十一行、小字双行。字面高約二一・二糎。少しく訂字あり。巻末「……亥いとかしこき事ならすやは　義門」と署す。本文三丁。紙面縦約二三・六糎。

本書は天保十三年三月刊「奈万之奈」三巻の補遺とも云うべきもの。男奈万信之奈とは和名類聚鈔の上野国利根郡に見える郷名で、丁度此二字が撓ヌル韻の二種の別を表わしている所からの命名。本書中にも「いはゆる撓ぬる韻の文字して物せんときはしをり占（ムの右に○印あり）とやうにかけは協へともそれをしをり前（ンの横に○印あり）とやうにかきては協はず万葉集にはかゝる文字の用格あやしきまておこそかに正しうそ有ける」と云い、「そも〳〵漢土よりまゐれる字書韻書どものいまだ今のよのやうには見えもしらがはさりけんむかしにかゝらし万葉なほ遡り見れは日本紀古事記に件りのン韻ム韻の字を用へる格りのいはゆる韻書とものの規矩に正に符カナへるは亦いとかしこき事ならすやは」と結ぶ。乃ち「えり」という語は、信をしり・篇をへり・訓をくりとするのと同様に、縁から出たものだとする。本書旧蔵者磯野秋渚の「心の花」八巻三号所掲の翻字文が、後掲「資料集成」（三巻別巻三巻）に再録されている。

釈義門、俗姓東条氏。若狭小浜妙玄寺住、悉曇から入りよく国語研究を為した。天保十四年没、享年五十八。「義門全集」

「義門研究資料集成」が編まる。ハ〇九―一a―二二―一

日本紀私記提要　森枳園（立之）　自筆　半一冊

茶色表紙（二三・六×一六・一糎）貼題簽に「日本紀私記提要」と書す。表紙は反古裏を使用。「日本紀私記提要（題下に「森／氏」の朱印押捺）」と題し、「弘化三年丙午初冬上旬以勢州山田御巫尚書所蔵／応永卅五年鈔本自写校合畢／藤原春村判」とある所謂御巫本、元奥書に「右上中下三巻之私記者若狭国家士安倍氏所蔵也組／屋国彦伝写之本ニテ写了／于時文化三年丙寅四月十五日　岡崎俊平判／同年四月十八日以安倍氏之元本校合了判」とあり、「春村曰コヽニ所謂上中下ノウチ上ハスナハチ此本ナリ中下ハ神代上／下ノ私記ニテサキニ伊勢御巫尚書ノ所蔵応永ノ原本モテ／写シタレハ今ハウツサス但コノ本ハ内藤広前ノ蔵本モテ写／シヌ　嘉永元年戊申十月五日」とある本（次に「右神代上下一冊抄本従木村櫛斎借読分以呂／波声類撮抄国字要語有益於我鑒家者／若干首如左／文久癸亥七夕前一日書于昌平橋西之／直楼上／枳園森立之」と記す）、「小嶋于今得此号也　墨付廿三葉」の、奥書に「日本紀私記残欠一巻就一秘庫御本摹写早／嘉永三年七月二日平種案／　安政四年丁巳十二月十七日写早此本元来／巻物ナルヲ今トチ巻ト改ム　久米幹文／　右書一冊借櫛斎蔵本抄了／元治甲子孟秋中九日莱翁立之」と記す計三本の日本紀私記の、巻首・巻尾・奥書等の著録である。単辺（一九・六×一三・二糎）有界十行粗黒口単黒魚尾墨刷罫紙使用。提要に続いて、先に引用した枳園識語中に見えるイロハ別の国字要語が摘録されている。此方が提要に比し、丁数が格段に多い。呂利留礼良介天恵世の項は、項名を記すのみで語句の記載はない。白紙の葉（特に本文の前後）がかなり存する。墨附五一丁。

枳園は福山藩儒医、書誌学に入る。明治十八年没、享年七十九。ハ〇九―一a―二三―一

白藤詩艸　鈴木白藤（恭）　自筆　半一冊

後補黄土色表紙（二四・二×一六・七糎）双辺刷枠題簽に「白藤詩草」と書す。扉「白藤詩艸」或は元表紙か、対するに巻末に遊紙一丁あり、元裏表紙か。内題なく、巻頭「雨歩礫川」と題して本文に入る。無辺無界八又は九行廿字。字面高約一八・九糎。朱筆の句点圏点訂字等あり、まま眉上・行間に朱評語を存す。緑筆圏点、墨筆の訂正あり、また胡粉の如く黄で塗抹し訂字せるあり。青色の不審紙二箇所ほどに貼附さる。巻末に「斧正」と書し、その下端に「鈴木恭艸」と記す。襯紙挿挾ま

る。全六丁。

本書中の詩の題に「癸亥七月既望」「壬戌十月之望」の年紀が見える。恐らく享和二・三年頃の詩作であろう。

鈴木白藤は書物奉行にして、森潤三郎氏の「紅葉山文庫と書物奉行」に伝さる。伝中「昭和六年秋に至り、浜野知三郎氏白藤詩艸一冊を得て予に郵寄し、研究資料に供せらる」とし、種々の考証が加えられているのが正に本書である。白藤また古賀侗庵の岳父に当る。嘉永四年没、享年八十五。ハ〇九—一a—二四—一

幕朝崇文録　増田岳陽（貢）　自筆　半一冊

濃黄色布目地空押網目文様表紙（二四・〇×一六・三糎）題簽剝落せし痕あり。見返右上に「増田岳陽稿本」と書す。明治十九年八月　岳陽増田貢識「幕府崇文録序」を冠す。巻頭「幕府崇文録／東京　増田貢述」と題署す。双辺（一八・七五×一二・六糎）有界十一行、裏丁匡郭外下端に「紙儀板」と刻する白口単黒魚尾藍刷罫紙使用。行廿四字。訓点・句点を施す。眉上書入、切貼訂正等あり、一部剝落す。巻頭部の眉上書入には朱筆の句点訓点を施す。全十六丁。

本書は明治二十四年まで高等師範で教鞭をとった著者が、自ら序に記すように「無知旧事。而多質於余。余少栖昌平。拝丁祭。一斎佐藤翁。……退而閲泰平年表。採関孥者。若干条。補以他乗。附之漢訳。抑表起天文壬寅。終天保丁酉。得年二百九十有九。……頃余講経於洋孥之中。而気頗振矣。噫孔道未墜地。……為之慨而筆。欲使世之聵矇。知幕朝崇文之盛。」したものである。東照公家康から、文恭公家斉の寛政十三年十一月迄の文事を摘録してある。

著者は明治卅二年没、享年七十五。なお本旧蔵者の浜野知三郎氏は、高等師範学校国語漢文専修科を明治廿九年に卒業している。ハ〇九—一a—二五—一

筆適　〔平沢旭山（元愷）〕　自筆　半一冊

後補布目地渋刷毛目表紙（二三・〇×一六・三糎）双辺刷枠題簽に「筆適　沢元愷自筆」と書す。扉（元表紙）左に「筆適」右に「郡名考」と記す。左下に「三」の文字見ゆ。尚本文中に元表紙と思われるものあり、左に「筆適」右に「国字一（三・五）」と記す。国字四かと思われる元表紙一丁書脳部より切断さる。「郡名考」一九丁を冠す。内題「筆適」と記し二行隔てて本文に入る。左右双辺（一六・五×一一・七糎）有界八行白口墨刷罫紙使用。朱墨訂正・不審紙等あり。まま眉上に書入、重出等

の標示あり。国字三の途中から眉上に○印を記した箇所あり、ほぼ関連語が続くように見えるが、分類・排列等の基準は有か無か不明である。国字一―一六、三―一四、(四)―廿五、五―一四丁。

江戸中後期に流行した一種の唐和辞書で、寧ろ類書に近い編成だが、序跋なく分類排列の法が今一つ分りにくい。書名の如く筆の適くままに記録したノートの類か。語釈も和文あり、出典をそのまま記すものありで整わない。郡名考も考とはあるが、殆ど郡名の名寄せである。

本文から摘録してその一端を示す。

風子又風漢　モノグルヒ
細作　シノヒノモノ
無神人　キチガイ風顛也
書僧　本ヤ也古ホンヤ本ノ中ガイト也昌断
窮鬼　ビンホカミ韓文
長恩　書籍ノ神ノ名又文神又文昌アリ
厠鬼　セツイン神柳文
暴涼　虫ボシナリ唐百官志
温書　書ヲサラヘヨミスル也会典
金糸烟　キサミタバコ
臥牛　シヤカゴ三才図会又石籠
九連環　智恵ノ輪ノ類也蒙求
解手　セツチンニユクヿ大便スルヿ見奇功新書

語彙は草花・食物・天象・衣・居住・諸職・鳥・樹木他多岐に亘る。国会図書館に存する同名の手稿本・写本各一冊は、随読随抄・考証の類で、本書とは何ら直接に関わらないが、岩瀬文庫に存する写本により、本書の欠落部分を補うことができる。

著者は昌平黌出の儒者、寛政三年没、享年五十九。「華陽皮相」の著者として知られる。ハ〇九―一a―二六―一

二荒遊草　小中村清矩　自筆　半一冊

白色空押温古知新卍つなぎ表紙（二四・二×一七・九糎）に直に「二荒遊草小中村清矩自筆稿本」（本文と同筆か）と書す。扉「二荒遊草」。巻頭同。無辺無界十行。字面高、和歌部分で約一九・二糎。紀行本文一、二格を低す。訂字・挿入少しくあり、やや長文の切貼訂正一箇所あり。襯紙挿挾まる。巻末「二荒山の奥なる温泉をみてよめる長歌」十四行の後に、「追加／二荒山の神社にまうてゝふるき厳瓮をみるこはいにし年／黒かみ山のいたゝきなる社のあたりより堀立（ママ）せるものとい／へば／ちと

せ経てあらはれにけんいつへにもいつの神山あとはしるしも／（隔一行）／明治十四年八月廿二日　小中村清矩稿」と記さる。巻頭眉上に「竹中／氏図／書記」の朱印あり。全五丁。

陽春盧と号し、制度史を考究、明治政府に出仕し東大で講じた著者の和文の日光紀行。

柏壁杉戸のあたりにてあまたの兵士に逢へりこれはいぬる日北海道へいてましのついて宇都宮あたりにていくさわさせさせ給ひしかそのかへるさなりとて皆笠もかふらす馬車にも乗らすしてる日の中をあへき〳〵行をみて君かため草むす身としおもはすはけふもあつさの野へにたゝんや

と始まる。

著者は明治廿七年没、享年七十四。ハ〇九―一a―二七―一

駁戎問答　上　野之口隆正　写（序歌自筆）　著者手校

本　半一冊

香色布目表紙（二二・八×一五・八糎）単辺刷枠題簽に「本学挙要附録駁戎問答　上」と刻さる。序表丁に神代文字の校本朱印を鈐し、裏丁「うち〳〵のことなから／前中納言水戸景山の／きみに駁戎問答／たてまつりけるとき／よみてそへ／ける／みなとにもあらぬ／心に呉くにの／ふねはかゝりては／なれさりけり／隆正」と序歌あり。本文巻頭「駁戎問答上／野之口隆正　著」と題署す。四周面取の単辺（約一六・七×一二・四糎）無界、「本学挙要」と刻する白口墨刷匡郭を用い八行に記す。版心表丁〇の下に丁附あり、第三十七丁以下は誤りを胡粉で塗抹し訂正さる。本文には、胡粉塗抹訂正の他、三箇所ほど誤りたる箇所を切り、裏から紙を宛てて書直してある。朱墨句点（朱点は少し）を附す。朱筆の濁点訓仮名僅かに施さる。巻末に「校本之外／禁伝写」の朱印を捺す。全四八丁。

昭和十二年、東京　有光社より刊行された野村伝四郎校「大国隆正全集」第一巻解説に、「翁の著書を門人に書写せしむるや、親ら一校の上、奥書をなし、神字の校正印記を巻首に弁して之を授与せらるゝが例である。大抵は巻尾に『校本之外／禁伝写』の印を捺し、或は奥書に此意味を添へ、稀には『不許漫他見』と書したるもあり」とある。本書は上のみで下巻を欠き奥書がないが、全集解説の云う二種の印は備わり、序歌も全集所掲の自筆写真と比べるに、詞書の文字に小異あるが同筆である。著者の一校看過本であろう。全集他に翻字され、伝写本も多い。

著者大国隆正、野之（々）口氏を称す。平田篤胤門、学は儒

・蘭・梵に亘る。明治四年没、享年八十。全集七巻が存する。

八〇九―一a―二八―一

論語賓説　〔雨森〕牛南（宗真）　写（寄合書）　著者手校本　大六冊

黄色表紙（二七・八×一八・七糎）貼題簽に「論語賓説牛南雨森宗真稿一（一―六）」と書す。第四冊は茶色表紙。表紙右に「学而／為政／八佾／里仁」（第一冊）「公冶長／雍也／述而」（第二冊）「泰伯／子罕／郷党」（第三冊）「先進／顔淵／子路／憲問」（第四冊）「衛霊公／季氏／陽貨」（第五冊）「微子／子張／堯曰／餘論」（第六冊）と各冊所収の小題を記す。第一冊見返を取り去り改装、第二冊見返には朱筆にて「千百年眼目　堅瓠一曰　ミナ載字ニ改ムヘシ」と記す。内題は第二冊巻頭にのみ「論語賓説巻之二」と。第一冊は数行をおきて「学而篇」と小題を記すのみ。蓋し未成本ならむ。単辺（一八・六×一二・七糎）有界八行白口単白魚尾墨刷罫紙使用。行廿字。中縫表丁に存する丁附は後述する峯間氏の筆ならむ。朱筆の句点圏点眉上への訂字書入指定の文字等が見られる。第五・六冊には押紙が多い。第四冊巻末一丁切取らるるが如し。第一冊―五一、第二―五一、第三―二七、第四―四八、第五―五四、第六―三一丁。

本書は、諸説・中でも宋から清に及ぶ雑考雑説類を多く引き、論語各篇の関連記事を輯集して、その大意要諦を明めんとしたもので、単なる訓詁注釈の書とは異る。賓説とは敬する客の説の意であろう。

文中「宗真按」押紙に「牛南云」等とあり、題署はないが、越前大野の儒医雨森牛南の編著と知られる。文化十二年没、享年六十。

本書には以下に記す元見返一葉が添附されている。

昭和十六年五月　峯間□□謹識／予、明治卅四年秋、箱根蘆之湯ナル恩人碑ヲ一見シテ、恩人／堺屋嘉兵衛君ト報恩建碑者雨森牛南先生トノ高義／ニ感ジ、両者ノ後裔ヲ探究スルコト三十五年ニシテ、前者／ヲ堺市ニ得、河盛房吉君是ナリ。後者ヲ東京市ニ得、／杉浦工学博士是ナリ。予、是ニ於テカ、蘆之湯郷人ト相／謀リ、昭和十年ヨリ両者ノ後裔ヲ蘆之湯ニ会シテ／恩人碑祭ヲ始メ、今茲第七回ニ際シ、該碑ノ道徳的意義ニ／甚大ナル興趣ヲ有セラル、斯文会幹事浜野知三郎君ガ／新ニ市ニ獲ル所ノ牛南先生ノ遺著「論語賓説」ヲ会衆／ニ示ス。以テ本書印行ノ篤志家ノ世ニ出デン事ヲ求ム。是、予／ノ念願タルノミナラズ、蓋シ

亦吾ガ友浜野君ノ志ナルベキヲ以テ／ナリ。敢テ巻頭ニ題ス。但シ、本書ハ、海内ニ斯ノ一本ヲ見ルノミナル／モ、牛南先生ノ真筆ニ非ザルハ、来会ノ金沢文庫長関靖君ノ考勘ニ係ル。

此見返の上に紙片が貼附され、ペンで以下の如く記されている。

此一枚ハモト論語賓説巻一ノ見返シナル／モ峯間氏ハ浜野先生より(ママ)借用シ／タル此貴重本ニ無断ニテ題言ヲ／書シ且訓点ヲ加ヘタル如ギ(ママ)甚ダ／無惨ナル事ヲ行ヒタルニ対シ、浜野／博士大ニ奮慨サレ頼マレタル覆印ヲモ拒／絶シテ敝社ニ命シテ返納セシム

本書には第一冊第十六丁第一行迄青鉛筆で、以下第二八丁裏第二行迄墨筆で訓点が施され、ま送仮名も振られている。また著者自筆の朱書入が眉上に記されているが、それらを全て抹消し、本文中に青鉛筆或いは墨筆で書加えている。全て峯間氏が、本書を印行の底本原稿に為さんとしての所業かと推せられるが、自ら記す「海内ニ斯ノ一本」を汚すこと甚しい。丁附もまた出版のため、峯間氏が記したものであろうが、誤って書直した痕跡明瞭である。記して書を見る者の自戒とする。ハ〇九—一a—二九—六

釈迦考草本（外題）・玉のゆくへ　〔狩谷棭斎〕自筆（玉）

〔村田春海〕撰　〔狩谷棭斎〕写　半一冊

柴色表紙（二三・五×一六・二糎）に直に「釈迦考草本／魂のゆくへ」と朱書し、下に「狩谷望之著」と書す。書名は自筆か。著者名の墨書、或は森約之筆か。巻頭に「森／氏」の朱印を鈐す。森枳園旧蔵。「釈迦考草本」は内題なく、「輟耕録云」として直ちに本文に入る。料紙は「玉のゆくへ」と共通の双辺（一八・七×一三・六五糎）十行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。漢文は十九字程。朱墨書入訂正脚部に及び、眉上に按語等あり。抹消・切貼訂正等多し。片仮名書。一二丁。「玉のゆくへ」は内題同。僅に訂字あり。第四・五丁の間一丁切取らるるも、文意続く如し。平仮名書。六丁。

「釈迦考草本」は、和漢の諸書を引き按語を加えた嵯峨清涼寺の釈迦にまつわる考証。「玉のゆくへ」は、本文を引用しながら、やや梗概を示せば以下の如し。

宣長が黄泉に赴くと、門もる鬼が「宣長をみていかておそかりつるよなといひてやをらかいつかみ」審判にかけ、神の道にのみ心をやりて仏のかたをはいひくたした罪により、生はき・逆はきにし地獄に落さんとする。地獄大君を見て、宣長はみる

に聞くにたゝわななかれにわなゝかれて罪につかんとする時、空のあなたよりやよしはしと天照大御神が現れ、「本居の宣長は神の道にふかくおもひ入て一すちなるやまとたましひに」賞で、「あらかしめ高天原にいましを住ませんとて高御座する待て」いたと云い、天路はるかに宣長と共に昇り、万玉好命と称えて神々の座へ迎えようとする。その時大まかつひの神が現れ、宣長に「汝か書おける文にむねといへるよしとて聞しによの中に何事も正しきことわりのまゝならて邪なる事のおほかる又善人も禍(マガ)り悪き人も福(サカ)ゆるなとをみなわかあらひなりとあなかちにいひきはめしはいかにそや大かたそは人よしとみゆる人もおのかしゝあしかる心の人しらすありてわさはひを得あしとみゆるも下心はさもあらすあなるかさかゆるあり又天地のうちにも世のうつり行につけてをりふしのかはれるふるまひ有はおのつからなることわりそかしさるをなへてわか心よりおこることゝのみおもふよいかてかくわれをうたてしきものにいひはなしたると」難詰する。宣長はたゝしとゝに汗あえてひれふすのみである。以下最後の部分を原文を引いて示しておく。

かゝるねちけ人ともしろしめさてかたしけなく神の位に数まへ給はせんとしもおもほしけることよとく〳〵やらはしめ給ひねとしこちたまへは大御神もうへなはせたまひてまをしのまことあれは大禍津日神八十禍津日神相はからはして遠くねの国へと神やらひにやらひ給ひにけり宣長は今そせんすへなく涙しとろにて又もよみちへとたちかへりけるかかくなんおもひつゝけけるとそ

赤鬼のつれなくみえし地獄より
まかつ日はかりうきものはなし

先述「石室談草」の引用と云い、本書と云い宣長あまり旗色がよくない。「玉のゆくへ」は訂字も少く、他著の手写本と見え、写本で伝わる村田春海の同名書と比するに、ほぼ同文である。因みに椋斎は既に十八歳時に、「衝口発」「鉗狂人」の宣長のからんだ論争書の、校字書入本を作成している。

狩谷椋斎、書肆青裳堂の子、津軽藩御用達津軽屋三右衛門を継ぐ。屋代弘賢門、考証学を究め、後の文化史・書誌学等として発展する学問の端緒を開く。また椋斎を取巻く文化圏に属する人々の行った為事は、現今の共同研究の濫觴と云い得る。著作多く、日本古典全集に「狩谷椋斎全集」九巻として収められるが、著作の一部に過ぎない。天保六年没、享年六十一。八〇九—一a—三〇—一

本朝度量権衡　〔狩谷棭斎〕　自筆　半一冊大一冊

柴色表紙（二二・八×一五・五糎）に直に自筆にて「度量称」と書す。後補黄土色表紙（二七・七×一九・七糎）は、本文庫で改装作成せしもの。見返・裏表紙見返共、本文に連関する面積等の覚書あり。巻頭「本朝度量権衡」と題す。左右双辺（一七・三×一一・五糎）有界十行、裏丁匡郭外下端に「玉森堂」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。眉上行間に朱墨書入訂正、また塗抹・切貼による訂正が施されている。全三一丁。本書に挿入されていた度量権衡に関する覚書の断簡と、「延暦十陸年／丁丑四月日」の年紀ある鞍馬寺古舛の拓一葉は、本文庫に於て、台紙に貼附し一冊に改装した。全一一紙。

本書は、名著「本朝度量権衡攷」の編纂過程に於ける資料ノートで、未だ和漢の諸書からの輯録で、文章とはしていない部分が多い。

尚本文庫には、裏面に棭斎手識の存する親友松崎慊堂に贈られた模製の和漢古尺廿一本が蔵されている。ハ〇九―一a―三一―二

簣窓居士文藁　序　市野簣窓（光彦）　自筆　半一冊

柴色表紙（二三・七×一六・七糎）に直に「迷庵文稿」と書す、他筆ならむ。或いは渋江抽斎筆か。扉「簣窓居士文藁」扉裏に「序」と題して本書所収の序の目録を掲ぐ。巻頭「簣窓居士文稿／江戸　市野光彦　著」と題署す。無辺無界十行十九字、字面高約一九・五糎。朱訂字一箇所あり。綴穴より見て、始め仮綴のものを、現在の線装に改めたる如し。本文一五丁。

東莱博議序・山氏摹法帖図章譜序・心得録序・玄門上人栖隠集序・刻漂客奇賞図序・金銀志序（末に「寛政丙辰」の年紀あり）・義人録序・寿清水士恒三十序・青山氏母八十寿序・送加瀬子直還郷序を収めるも、最後のものは途中から佚している。尚目録には上記の他、送杉山子方帰省駿河序・送木口君懋赴藩序の二作を載す。

市野簣窓、のち迷庵と号す。俗に云う神田弁慶橋の辺にて家業の質商を営む。棭斎と親交ある市井の考証学者。三右衛門と称し、棭斎と合せ「町人の学者はたった六右衛門」等と謳われた。文政九年没、享年六十二。

近時質屋史研究から、迷庵に関心を持たれた御自身質商を営まれる横須賀史学研究会員鈴木亀二氏の「市野迷庵覚書」が、東京質屋協同組合広報誌「質屋業報」に掲載され、後労作「増補近世質屋史談」に収録された。ハ〇九―一a―三二―一

簣窓摘藁　市野簣窓（光彦）　自筆　大一冊

後補梨地絹表紙（二五・七×一八・二糎）双辺刷枠題簽に「簣窓摘藁市野光彦著」と書す。新補遊紙に「穆如山荘」（浜野知三郎氏）の朱印。元表紙か、反古の左肩に「簣窓摘藁」と書す。巻頭「簣窓摘藁　市野光彦著」と題署す。無辺無界九行十九字内外、字面高約一九・四糎。巻末の二丁は左右双辺（一九・三×一一・八糎）有界九行白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用、行廿字。一部表丁書脳下部に丁附あり。訂字抹消等がかなり見られる。罫紙二丁は体式前と異り、「詠桜花用皥斎続桜花韻十一首」と題された七言律詩を書し、末に「市野光彦草」と記す。光彦の上に夫々「光」「彦」の朱印を鈐す。本十一首には訓点・送仮名を附し、公任には朱引ならぬ墨引が施されている。尚本十一首には、題の前に「これはのそくべし」と書入れられている。元裏表紙（反古）の見返に「近日家業少間、探癈笥而得旧詩、乃／摘可読者若干首録之、昔与二三兄弟／相共吟詠以遊、今也交遊離散、予亦／営々治産、癈学十年、口不言詩、人生／不如意者如此搔首嘆息而已／文化乙丑冬日　簣窓（以下破損）」と感懐が述べられている。もと仮綴であったのを料紙より大きな襯紙に貼り、線装に改められている。原料紙縦約二四・四、罫紙同二四・五糎。全一三丁。

本詩集中に徴せられる年紀は、「寛政丙申東遊太田村寓加瀬子直家」「過程谷駅甲子初夏之作」であるが、寛政に丙申の年なく、丙辰八年か庚申一二年であろう。甲子は文化元年か。また「客中吟」の題下に、「結句丙酉初夏（迷庵遺稿では丁酉とす）宿程谷所得」と読める自注を施すが、この年紀も不審である。ちなみに巻末自識の文化乙丑は文化二年である。其年から溯って「癈学十年、口不言詩」とは単純に計量すれば、ほぼ寛政七年前後の事となる。ハ〇九―一a―三三―一

漫抄　〔市野迷庵〕抄録　自筆　半一冊

縹色表紙（二三・二×一六・四糎）貼題簽に「迷庵漫鈔自書原本」と記す、或いは渋江抽斎の筆か。扉の如く「朱竹垞集／随園詩話／茶餘客話／伐蛟説銭穀備要／斉東野語／説鈴」と書する〔目録〕あり。随園詩話の箇所に「森／氏」朱印を鈐す、森枳園旧蔵。巻頭「漫抄／吊李陵文曝書亭集」と題し、抄録文を書す。習字を兼ねしものか、字体・体式等区々。大略を示せば〔朱竹垞集〕無辺無界十行廿字、字面高約二〇・六糎。但し第十六丁より十二行廿三字、まま朱句点・朱引を交え、最終の二丁は十行廿字の前半の体式に戻る。二五丁。次「随園詩話／倉山居士著」

と題し、左右双辺（一九・三五×一一・七糎）有界九行白口単黒魚尾の墨刷罫紙を使用、行十七・八字、行草体。一六丁。次「茶餘客話／（隔一行）／山陽阮葵生吾山」と題し、九行廿字。次「銭穀備要　武林王又槐蔭庭編輯／伐蛟説　雍正十二年暑両江督院魏通飾乾隆五十一年廷臣又頒行」と題し、九行十八字。上記二書追込一二丁。次「斉東野語」と前述罫紙第一葉表の上象鼻に記す、行廿字。一〇丁。次「説鈴」次「閩小記　櫟下周工亮（ママ）」と題し、共に十行廿字。上記二書追込七丁。

江戸の学者は読書をしながら、自分用の詞華集・類書・辞書・索引等の覚書的なものをその都度作成し、実用に供する事が多かった。本書もそうした所謂雑抄の一であるが、同時に漢字の稽古用とした節が窺える。ハ〇九—一a—三四—一

〔簣窓文稿〕　市野簣窓（光彦）　自筆　大二冊

後補布目薄茶色表紙（二七・一×一七・九糎）貼題簽に「迷庵先生自筆文稿」と書す。第二冊、後補茶色表紙（二七・八×二〇・〇糎）題簽同前。新補遊紙に「穆如山荘」の朱印鈐さる。内題なく「国子監主印章記代林家門人」と題して本文に入る。各種稿本を綴録輯集せしものの如く、料紙体式区々異なれり。左右双辺（一九・〇×一一・八五糎）有界九行白口単黒魚尾黄刷罫紙あり、行廿字。左右双辺（一九・三×一一・八糎）有界九行白口単黒魚尾墨刷罫紙あり、行同じく廿字。無罫紙は九又は十行、廿字或いは廿一字。第一行の字面は約一八・三糎。体式区々にして各稿本により字面高不等。朱藍緑の句点、朱藍墨筆の訂字、墨筆にての塗抹、朱引、朱声点等あり。切断し、下から紙を宛てて訂正せし箇所あり。まま訓点送仮名を附す。第二冊の第一葉は黄色に染めた料紙が使われている。両冊共料紙より大きな襯紙に（一部は同じ大きさ）裏打されている。第一冊一六、第二冊四丁。

第一冊第一丁匡郭外書脳に「記」「射説」「節限十二首」等の語が見える。以下収録されている作物の巻頭・巻末の題署を掲げて参考に供する。「国子監主印章記／光彦稿」「静思精舎記／寛政四年壬子春三月市野光彦撰」「足庵記／簣窓」「蛙亭記／二十九叟簣窓」「三餘堂記／寛政二年秋八月江戸市野光彦撰」「安故斎記／五月廿六日／光彦藁」「晩翠園記」「河原林隆亭先生墓碑銘／享和二年壬戌夏六月／友人江戸市野光彦俊卿撰」「恭静先生墓碣／文化二年乙丑秋八月江戸市野光彦撰」。以下第二冊「隅田堤観花記」—第二丁以下欠。「確亭記／寛政壬子秋夕市野光彦記」「飛鳥岡賞花記／市野光彦稿」—「寛政辛亥文章」と朱書

あり。八〇九―一a―三五―二

詩集伝筆録（外題「詩経集伝鼓吹」）　市野〔迷庵〕（光彦）　自筆　半一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二四・二×一七・二糎）に直に自筆にて「詩経集伝鼓吹」と書す。巻頭「詩集伝筆録／序」と題し、序の各節の大意を要約す。本文は「国風一」より鄘風の「定之方中」迄を存する。単辺（一九・一五×一三・四糎）有界十三行、下象鼻に「友教堂蔵」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行冊字内外不等。第九・十丁は重複、但し第九丁は全て篇章名等の語句が胡粉で塗抹さる。第十一丁は本書とは全く別の一篇（戦国策巻十一「斉四」の一部）が混じて綴じられている。此一丁には朱の句点訂字が施されている。巻末に市野光彦「詩集伝会業引」あり。裏表紙は「消夏湾記」の反古を使用す。全一四丁。

諸書を引き、語釈や諸家説を摘録した「詩集伝」講読の簡単なノートで、章名を記すのみの所も多い。年紀を識さぬが、内容に鑑み、筆蹟もまた若年の筆か。

巻末の引は詩集伝の簡単な提要考証をなし、以下の如く結ぶ。

右黙斎丸子氏弘篤之説也余近日／与二三友人会読集伝首掲此説以質之且旁拠毛鄭孔呂以原訓詁就釈文／詩攷而考異同庶幾不憚鉛槧之労細心緝訂焉見行悪冊無阡無尾一／触目已厭其陋強解小児過称山東之学究而不知紫阪之真訣訿々／唾罵不絶其口豈非職由哉余且待卒業而命能書繕写一本襲以異／錦熏以異香筆晨良夜繙帙諷咏則講説確不能解頤而自得尚足／免牆面矣市野光彦。八〇九―一a―三六―一

精里三集詩稿五巻　〔古賀〕精里　写（〔古賀侗菴等〕）　半二冊

紺色表紙（二三・五×一六・五糎）貼題簽に「精里三集詩稾乾（坤）」と書す。「精里三集詩稾目録」を冠せ、各巻巻頭以下の如し。「精里三集／己巳稿」「精里三集詩稿巻二（朱筆、抹消さる）／庚午詩稿（墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消）五十九首（朱筆、抹消）」「精里三集詩稿巻二（朱筆）／辛未詩稿（墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消）一百十七首（朱筆、抹消）」「精里三集巻二（と墨筆にて記し、巻の上に朱筆にて「詩稿」と書入れ、また二の上に朱筆にて一の字を記し「三」とす）／壬申詩稿（墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消）七十七首（朱筆、抹消）」「癸酉詩稿（墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消）一百四首（朱筆、抹消）」（以上乾冊）「精里三集詩稿巻四（朱筆）／甲戌詩稿（墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消）九十六首（朱筆、

抹消)」「精里三集巻三(墨筆、朱○印を附し抹消)乙亥詩稿(墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消)九十七首(朱筆、抹消)」「精里三集詩稿巻五(朱筆)/丙子詩稿(墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消)七十九首(朱筆、抹消)」「丁丑詩稿(墨筆、詩の字に朱○印を附し抹消)十首(朱筆、抹消)」。乃ち始め三年度ずつを各一巻、計三巻の編成であったのを後に五巻に改めたもので、朱筆で書入られた内題は、全て匡郭外に記されている。左右双辺(一九・四五×一三・五糎)有界十行、下象鼻に「愛月堂」と刻する古賀家の白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行廿字、小字双行。朱筆の句点校字あり。下層稀に上層に、主として校訂に関する附箋が貼附され、眉上の朱墨両様の校字書入・押紙と共に、よくその編纂過程を窺わせる。侗庵を中心とし、穀堂等の息男が分担で編纂したものの如くで、書体・体式等必ずしも一様でない。乙亥稿には切貼が多い。眉上に「五古」等と、朱墨にて詩の体を識す。附箋には一部欠損が見られる。各巻頭表丁の版心上層部を、朱で塗って標識としている。己巳稿十一、庚午稿十二、辛未稿廿三、壬申稿十六、癸酉稿十七丁(以上乾冊)、甲戌稿十七、乙亥稿十八、丙子稿十八、丁丑稿三丁。

目録によると「巻一/己巳稾五十四首/庚午稾五十九首/巻二/辛未稾一百十七首/巻三/壬申稾七十七首/癸酉稾一百四首/巻四/甲戌稾九十七首/乙亥稾九十七首/巻五/丙子稾七十九首/丁丑稾十首」の、文化六年から没する十四年に至る最晩年の詩集で、「三集」と称するは、上梓された精里の詩文集の初集二集に次ぐ意。三集は文のみ刊行されている。本書を見るに校訂上の附箋多く、未だ成稿には至らなかった如くである。

古賀精里は佐賀藩儒、後抜擢され幕府儒官となる。文化十四年没、享年六十八。八〇九—一a—三七—二(追記二)

〔穀堂詩文稿〕〔古賀穀堂〕自筆 大一冊

後補黄土色表紙(二六・八五×一八・八五糎)貼題簽に「古賀穀堂先生詩稿」と書す。内題なく「応教」と題する七言律詩に始まり、後半は文稿。同前「愛月堂」罫紙使用。行十六字、文稿は十四字。まま朱墨句点訂字あり。眉上に○・○に+を重ねた符号や、重出・複出の注記、書入等あり。各詩文書体・体式一様ならず、書は行書が多い。第八—十五丁は表丁書脳下端に丁付を記す。全十五丁、裏打修補さる。途中文意続かぬ箇所あり、欠丁存するが如し。

本書中には「己丑九月十三夜」「己丑中秋後一夕」「己丑八月時」等の年紀が見え、文政十二年の作か。「廻瀾社詩会」「贈文

晁」等のことばも見える。

穀堂は精里の長男、佐賀藩参政。天保七年没、享年五十九。

ハ〇九―一a―三八―一

鄙詩自註　〔古賀穀堂〕　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・八五×一九・一五糎）双辺刷枠題簽に「穀堂先生詩註」と書す。巻頭「鄙詩自註（詩始め稿とありしを改む）／秋懐八首八首造憶昔遊叙述心事而作也」。無辺無界十行十九字内外不等、注小字双行。字面高約二二・八糎。墨筆塗抹訂正あり。眉上に二箇所ほどある注記書入は、左右上方を切り、紙面に折込まれてある。全五丁。入紙を施す。

秋懐八首其一―八・病懐八首（題下に「自注具／載其下」と小字双行に記して省略さる）・憶昔遊・寄祭酒林公・自王沢洲隼津途中作磊愧歌贈井収・藤房遁世図・遁世芳野山中・贈先鋒将軍歌の自注で、要語を大字で摘録し、その下に小字双行で自注自解を施す。題名下に同様の自解が為されているものもある。

ハ〇九―一a―三九―一

従輿漫稿　〔古賀穀堂〕　自筆　半一冊

後補白色シボ地空押亀甲三手杵文様表紙（二三・八×一五・六糎）双辺刷枠題簽に「従輿漫稿古賀穀堂」と書す。巻頭「従輿漫稿　十六首」と題するも、「十六首」を朱筆にて抹消し、眉上に同じく朱筆にて「〆十一首」と改む。内題右肩に、同じく朱筆にて「文政二年己卯」と書入らる。「十六首」の下には墨筆にて「大（カ）」と書かる。単辺（一七・六×一二・一糎）有界九行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行十二字内外。朱墨句点訂字あり。行書体。全四丁（十一首）の後に一丁あるも、眉上に朱筆にて「コレヨリ／サキノ詩／ハ不入」と書入らる。襯紙に裏打さる、原料紙縦約二二・六糎。

文政二年佐賀から東征の途次の詩稿であろう。菅茶山や岡山万波文学等に贈った詩が見える。ハ〇九―一a―四〇―一

清風堂小酌聯句他　〔古賀穀堂〕（燾）等　写　大一冊

後補黄土色表紙（二六・七×一九・二糎）双辺刷枠題簽に「清風堂聯句」と書す。巻頭「清風堂小酌聯句十首」と題し本文に入る。左右双辺（一九・三×一三・五糎）有界十行、下象鼻に「清風堂」と刻する穀堂の白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行廿四字。襯紙に裏打さる、原料紙縦約二六・二糎。全三丁。

清風堂小酌聯句十首は、燾・韡兄弟による七言を交互につけあった絶句体十首。小洞天聯句は題下に「古賀中島」と題す。中島は侗菴門下、佐伯藩儒の中島米華（大賚）。本聯句以下行

廿六―卅一字ほどで、前掲聯句の附載と見るべきか。賚・燾両名により、賚の五言に対し、以下各五言句を二句ずつ連ね、最後は燾が三句を連ねておさめる。滄浪亭聯句は、憲・廸・煥・燾・成・矩方の六名による五言句。星夕静観楼聯句は、恒軒・東洛・圮南・松塢による七言の絶句体である。連衆の伝を詳かにしない者が多い。八〇九―一a―四一―一

沈痾絶句　〔古賀侗庵〕　自筆　大一冊

後補茶色表紙（二六・八×一八・九五糎）貼題簽に「沈痾絶句　古賀侗庵先生手稿」と書す。巻頭「沈痾絶句」と題す。左右双辺（一九・七五×一三・五糎）有界十行、下象鼻に「愛月堂」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行廿字、朱句点、墨筆塗抹訂正あり。小紙一葉が挿入されている。七言絶句四八首あり、一格を低して、その自注自解を記す。巻末に弘化四年丁未暮春旬一日　不肖増泣血百拝識〔跋〕あり。全十二丁。

自注によって、やや侗庵の病態を捜れば、「予六七年来、患右手頑痺、心神常壱鬱無聊、疾已崩乎斯時、」とあり、「辛丑（天保十二）二月、次子病狂易、九月荆妻長子倶患傷寒、十月、媳婦亦罹傷寒、皆為劇症、」と家庭内の不幸が重なる。翌る「壬寅三月、肥前侯宴宇和嶋世子荻侯于其第、予亦蒙招、濫造焉、荻侯遙見予右手、驚問曰、」と傍目にも分る状態となる。「予歳行十里而上者数四、以為常、旁資摂養、壬寅之秋遊玉川命網年魚、帰途至芝街、疲憊不能前歩、半里輙休憩、」という有様。「予性不嗜酒、深悪烟、恐茶助疝而不喫、頗用心于摂養、而有斯疾、」「予応塾生請、刪正其毎月文稿、欲以長進才思、至此、病而不能、」と託ち嘆く他ない。「丙午（弘化三）正月望、丸山遺火、風扇而熾、延焼二里餘、官舎危甚、予以被疾故、先乗轎避火于復原賜宅、然官舎幸而免、」「予所識列侯数人、聞予重病、使々問疾、且有提合盒之貺、予病不能飽喫、遍頒家衆、咸感戴大恵、」こうした間に外国船が来航し、開国を強要する。家には「次子狂疾中稍痊、客歳再発、間有不可寛恕者、顧次子雖狂、而良心猶少存、故姑錮之復原賜宅一室、令懼而悔改、」侗庵の中風は病勢を増し、「予疾危劇之際、不堪苦悶、自分一死、」「夏秋之交、炎威赫烈、倍蓰常年、予疾驟劇、半由中於毒熱、半由幽錮次子、憂念傷心、」とまさに入子の如き、がんじがらめの内憂外患である。自らの蔵書や著書の始末に、心千々に乱れ、「病来、医禁予結撰文詩、八月似疾稍軽、試構成一絶、是夕便発大熱、達曙不能睡、」と。修身斉家治国平天下を説く儒者の、切歯扼腕泣血の書である。

子の茶渓の跋に「嗚乎是　先考絶筆也初　先考右手浮腫鈍痛綿延十歳前年丙午（弘化三）之夏中毒熱鬱蒸煩悶自分必死然病少有間必操觚字縮小如豆麻手弥痺尚克卧思口占構文数篇召不肖乎枕側書焉迄秋秒痾勢大殺遽艸斯諸篇三日而脱稿手躯謄之時盤桓庭中自意或可期霍然故句中間逮焉寧知感発風起前症再動周体緊攣痛辛万端往々呻吟達且既而暴瀉六十許日竟捐舘舍嗚乎哀哉……」と。

尚侗菴には、「泣血録」と題する父精里を看病し、みとった折の日録が存する。精里の三男にして、昌平黌教授。弘化四年没、享年六十。ハ〇九―一a―四二―一

銷冤集抄　〔古賀〕侗菴　自筆　半一冊

後補白色シボ地空押亀甲三手杵文様表紙（二二・六×一三・八糎）双辺刷枠題簽に「銷魂集抄古賀侗菴」と書す。巻頭「銷冤集抄／侗菴　支離子　集唐」と題署す。双辺（一四・七×九・〇五糎）有界八行白口墨刷罫紙使用。行十八字、唐人の名は小字、三字名の場合は双行。一箇所訂字あり。全三丁、襯紙に裏打さる。原料紙縦約二〇・八糎。

「奉送　家兄穀堂先生」と題し、「其十五」迄の七言絶句十五首を収める。これらは「集唐」と題しているように、唐人の句を集輯按排して夫々起承転結に宛てた集句で、「其四」には題下に「三月初五日　穀堂先生来告／別終夜晤語不寝故有第一句」と小字双行にて注記し、「語到天明竟未眠白居易」という一句を引いた銷魂の詩が見える。ハ〇九―一a―四三―一

〔侗菴詩文稿〕　〔古賀侗菴〕　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・七×一九・一糎）双辺刷枠題簽に「洞菴先生詩文稿」と書す。内題なく「〇諫論」と小題して本文三丁。題下に「言」「造」「論」「二」の字が見えるが落書か。また小題の右に「口訂」の文字あり。無辺無界九行或いは十行、行十七字。字面高約二〇・九糎。句点を附す。一箇所レ点あり。塗抹訂正や題上の〇印は後の筆ならむ。

次に左右双辺（一九・一五×一三・三五糎）有界十行、下象鼻に「清風堂」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用の一丁あり。表は文の途中より始まり、裏は「遊霊巌洞席上分韻」と題する熊本にての作。行廿字。表丁は句点を附し、裏丁は白文。

次に双辺（一九・三×一三・八糎）有界十行白口単黒魚尾薄藍刷罫紙使用の一丁あり。これも文の途中より始まり、「首夏草堂遨石水丹三子賦」「送生先生之任崎陽」「又」の三首が存し、次の「七夕」は最終行に書かれて題名のみが遺されている。行

十八字、白文。ハ〇九―一a―四四―一

若皐贅人詩稿　文化二年　〔古賀侗菴〕　自筆　半一冊

後補白色シボ地空押亀甲三手杵文様表紙（二一・九×一三・七糎）双辺刷枠題簽に「侗菴先生詩稿」と書す。後述の青黎閣の罫紙一丁を副葉紙とし、巻頭「若皐贅人詩稿　文化二年閏八月廿二日」と題し、小題を記して詩稿を書す。双辺（一四・七×一〇・四糎）有界八行、下象鼻に「青黎閣」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。行十二―十五字ほど。青黎閣は書肆須原屋伊八で、文化九年に侗菴の父精里の大学章句纂釈を刊行している。白文、塗抹訂正あり。眉上に○に一或いは十を重ね書きした符号が記さる。本文十一丁。後に白紙のままの青黎閣罫紙が三丁綴じられ、巻末に「太神宮十九氏」匡郭外に「十巻」と記されているが、本文とは無関係のようである。襯紙に裏打さる。原料紙縦約一八・三糎。

本書は墨色も一様でなく、その時々に稿を書き継いだ文化二年閏八月廿二日よりの詩稿であろう。途中「乙丑重九」また終近くに「九月十三夜」と題する七言絶句が三首あり、その後になお三首が記されている。

因みに穀堂の長男も若皐と号するが、文化二年では年代が早すぎて的当しない。ハ〇九―一a―四五―一

〔侗菴詩文稿〕　〔古賀侗菴〕　自筆　大一冊

後補黄土色表紙（二六・六×一九・一五糎）双辺刷枠題簽に「洞（ママ）菴先生詩稿」と書す。内題なく「雑詩」と小題して二丁。無辺無界九行十九字。字面高約二三・四糎。以下文。「簡楢林公極」「与僧白龍」共三丁。同九行十六字。字面高約二〇・五糎。次に「与吉村迂斎」二丁。同九行十七・八字。最終丁裏は十二行書き。字面高約二二・一糎。全て句点塗抹訂正を施す。

「与吉村迂斎」では、文中「迂斎先生」と記しており、吉村迂斎は文化二年に没しているので、前述の若皐贅人詩稿同様、これも若き日の詩文稿であろうか。ハ〇九―一a―四六―一

〔侗菴文稿〕　〔古賀侗菴〕　自筆　大二冊

後補黄土色表紙（二六・八×一九・一糎）双辺刷枠題簽に「古賀先生文稿」と書す。第二冊同上表紙（二七・九五×一九・一糎）双辺刷枠題簽に同様に書す。内題なく、料紙体式区々なれど、大略を記せば以下の如し。

第一冊「先夫人碑陰記」一丁。文末黒く塗抹され、次行に「文政六季五月　不肖燾不肖煜謹記」とあり。次に述べる碑文共に左右双辺（一九・五×一三・四五糎）有界十行、下象鼻に

「愛月堂」と刻する白口単黒魚尾墨刷罫紙使用、行廿字。次に「犬鼻巌鑿開新渠遺沢碣（遺沢碣を碑と訂正）」二丁あり、「寛政元年己酉正月、但州達川大里正三木通庸、……（大里正を朱筆で消し、後イキルと朱筆にて傍書）」に始まり、巻末に「天保十二年辛丑五月紫溟古賀煜撰」と識す。同前罫紙使用、行廿字。朱筆の句点訂正あり。第一丁裏眉上に「三百十八字」、第二丁末行同「二百字」、巻末題署眉上に「十五字」と、朱筆にて字数を記す。次に「送／亀井元鳳序」二丁。「蓋今海内黄童白叟莫不知西州有之南溟先生也」に始まり、巻末に「古賀煜拝稿」と書す。単辺（一九・九五×一三・五五糎）有界十行白口単黒魚尾墨刷罫紙使用、行廿―廿二字ほど。一箇所訂字あり。本冊は清書本に近い。襯紙挿挾まる。

第二冊「倣九歌用湘夫人韵」「先君子三集跋」「松響閣筆話跋」三篇全四丁。左右双辺（一九・六五×一三・五糎）有界十行、下象鼻に「愛月堂」と刻する白口単黒魚尾藍刷罫紙使用、行廿字。訂正のない清書本。裏打補修さる。本帙或いは他筆を混じるか。

なお古賀家学の自筆稿本類は、本塾図書館にも多数蔵されている。八〇九―一a―四七―二

迷菴遺稿（外題）　市野迷菴（光彦）　写（渋江抽斎カ）

森約之手校本　半二冊

柴色表紙（二三・三×一六・四糎）に直に「迷菴遺稿　上（下）」と書す、或いは渋江抽斎の筆か。単辺（一九・七×一三・七糎）有界十一行白口墨刷罫紙に記さる。漢文は行廿字、各遺稿により書写の体式異る。版心表丁に小題・丁附を記す。

第一冊「簣窓摘藁／市野光彦著（著者名の題下に「森／氏」の朱印を鈐す）」と題し、「採蓮曲」以下六篇を収む。全て前掲「簣窓摘藁」に含まれ、前掲本の方が収録篇数がかなり多い。「客中吟」には、前掲本と異る「丁酉初夏」の語が見え（丁は眉上朱校字書入）、安永六年がそれに当るが、迷庵は明和二年生まれなので、餘りにも早すぎる。尾題「簣窓摘藁終」の題下に、朱筆にて「乙未十一月二日句」と記し、次行に「天保乙未冬十月廿五日写畢　滝波敦教」と書す。尾題の前に、前掲「簣窓摘藁」で述べた「文化乙丑冬日　簣窓」と題署せる同文の跋あり。全七丁。次に「詩藁後録」と題して、「偶成戊寅夏日、」「己卯元旦／贈妓余時年二十又二、」の二篇を収む。一丁。戊寅は文政元年、己卯は翌る二年。次に「寛政壬子秋日杉本良子敬序」（杉本良子敬に朱引）を冠せ、「南北諸臣詩評／江戸　市野光彦　述」序

共十丁。尾題「南北諸臣詩評終」。尾題の前に、寛政壬子秋夕神田市人市野光彦識「跋」あり、巻末に「天保六年十月廿九日写早　全葬／（以下朱書）丙申十月九日句」と書す。次に、末に「以上通計二十一首」と記せる「文集目録」を冠せ、「迷菴摘藁／市野光彦著」目共廿九丁。前出文稿二点と重なるもの十点（但し内一点は前出「文藁　序」目録に載るのみで、本文なし）。尾題「迷菴摘藁終」、巻末に「十月十七日青灯下校合句読（朱書）／天保七年丙申三月十九日卒業」と書す。

全て朱筆の句点校字朱引が施され、まま眉上に森約之の校合書入や案語が記されている。墨筆の訂字や、上方と左右を切り、内側に折込んだ眉上の校字もある。「南北諸臣詩評」は評一格を低し、詩と跋には朱のヲコト点又は訓点縦点が附されている。なお「迷菴摘藁」のみ、句点は藍筆で施されている。

第二冊「文藁後録」と題し七丁。迷庵の筆になる跋文十二篇を輯む。巻頭巻末の題署と共に、その細目を示せば「周易火琳林跋」「南島志跋／寛政壬子」「文選素本跋／文化丁丑五月廿日」「元本前漢書跋／文政五年壬午七月二日」「直江山城活字板文選跋／文政庚辰秋七月五日」「宋本三国志跋／文政庚辰六月／又云、光彦続録、／又云、壬午七月五日光彦復識、」「書宋本唐文粋後／文化十四年歳在旋蒙赤奮若夏六月、」「跋古板本柳先生文集／文政庚辰秋前一日」「書枯樹賦後／文化丁丑六月望日」「書雲麾将軍帖旧搨本後／文化丁丑六月望日」「旧刻春秋伝跋／文化丁丑七月」「足利本（三字朱書）荘子注疏跋／文化十三年秋七月」。巻末に藍筆で「十月廿五日句校了／全葬」と書す。次、内題を記さず、「古鈔国語跋」と小題して本文に入る。但し柱題「蔵書題跋」とあり。巻末に藍筆にて「右十八首并左伝博議序合為一局名蔵書／題跋」と書す。七丁。細目の巻頭巻末の題署を示せば、「古鈔国語跋」「国語補音跋」「伝長老書魏武帝註孫子上下跋」「鈔本鐔津文集跋」「古蒙求跋」「論語大永抄本跋」「元本中州集跋／文政六年十一月三日、」「論語集解国字抄跋／文化壬申八月市野光彦書、（市野光彦に朱引）」「論語皇侃義疏古抄本跋／文化十四年歳次丁丑六月望日、江戸市野光彦識、（市野光彦に朱引）／文政辛巳冬日迷菴再書、（迷菴に朱引）」「逍遙院御注孝経後／文政辛巳七月下旬、迷菴市野光彦識、（迷菴市野光彦に朱引）」「法隆寺所蔵薬師如来銅象光後記跋」「同寺所蔵釈迦如来銅象光後記跋／文政庚辰六月、」「武蔵国慈光寺蔵貞観抄本大般若経跋／文政辛巳七月廿七日、」「大和国宝（ママ）隆寺所収百万塔并慈心六度経跋／文政四年十一月、」「天平三年抄本大

通方広経跋／文政五年秋日、」「題朝鮮刊本靖節先生集後／文化丁丑秋」「巻子抄本校合論語跋／寛政庚申仲冬、」「書四庫全書簡明目録後／文政庚辰夏月」。次に「木金石帖目録序／文政甲申夏六月々生十八日」「木金石帖目録」共二丁。次に和漢文の遺篇を収むること以下の如し。末に「壬午八月廿七日　迷菴」と題署せる「論語郷党篇」等の文を掲げての講義筆録。同じく「文政五年壬午三月十六日　迷葬」と題せる同様の講義筆録。文政五年壬午夏　四月第六日　迷葬市野光彦撰「読書指南序」片仮名交り。「玉藻前之事」（漢文）「神道ノ事」「自然ノ事」「録云直指人心見性成仏／文政五年壬午八月六日迷葬」（漢文）「道ノ事」「陰陽ノ事」「稽古字義」「日本諸越ヲ中土ト称スル事」「題伊藤東涯刊謬正俗後／文政六年癸未八月七日　市野光彦題」「仏法ノ亨／文政六年九月廿五日夜録　迷葬光彦」「儒仏異同ノ事／迷葬／癸未十二月十八日　迷葬識」全十九丁。此遺文は注記した以外は、全て漢字片仮名交りで書かれた最晩年の作で、「日本藝林叢書」第三巻に「迷庵雑記」と題して、本篇のみ翻印されている。

巻末に「天保七年丙申十月七日於灯下卒業／滝波敦教／（朱書）十一月廿五日校合了　全葬」と記す。

文藻後録は柱題「文続」、本篇のみ版心表丁に丁附が記さる。「木金石帖目録序」迄藍句点・朱校字・朱引を附す。また眉上に三方を切って内側に折込まれた校字が見られる。木金石帖には、眉上や題下に藍墨両様の「此原本朱字」「比ヨリ朱字」等の注記がある。最後の遺文には柱題なく、一部に朱筆の句点圏点訓点校字朱引等があり、また「可提頭」等と眉上に朱書した指定の語が見える。

「書四庫全書簡明目録後」に、

余少有為学之志、頗以儲蔵、年及六十、業未能成、顧子孫不能亦保之、不如売与他人、以代盃酒之料、と。

「元本中州集跋」眉上に、「渋江箍斎云此／書皇国旧刊」、「玉藻前」眉上に、「抽斎云此開山二字／当刪」の朱書入がある。本書の字体も極めて抽斎の筆に似る。或いは抽斎写か。但し「滝波敦教」の署名と「箍斎」という記述に、断定を躊躇させるものがある。ハ〇九―一a―六二―二　（追記三）

〔簣窓文草〕　市野簣窓（光彦）　写（渋江抽斎カ）

森約之手校本　半一冊

縹色表紙（二三・七×一六・八糎）貼題簽に「迷庵文草　全」と書す、或いは渋江抽斎の筆か。内題なく「惟一斎記」と小題

して本文に入る。末に「寛政甲寅四月望日　簣窓主人撰」と題署す。第一・二行、題記にかけて「森／氏」の朱印を鈐す。無辺無界十六行、行廿五―廿七字ほど。字面高約二〇・〇糎。句点を施す。巻末に「文久元辛酉季冬廿一夜二更錠鐙下讐比稽合一過今日未時七分／大寒丑月之中気運至　同心叟主人西敦亭居士森約之」の校語が手写さる。六篇各一丁宛の全六丁。

他に「飛鳥岡賞花記／市野光彦稿」「隅田堤観花記／丙辰三月某日簣窓主人記」「確亭記／寛政壬子秋夕市野光彦記」「河原林隆亭先生墓銘／享和二年壬戌夏六月友人江戸市野光彦俊卿撰」（以上四篇前出文稿と重なるも、前掲遺稿にはなし）「時思亭記／光彦稿」を収む。

本帙所収の文は、前掲遺稿に見当らない。また字様から遺稿と本書とは、恐らく同一の筆写者の手になると思われる。遺稿に漏れた文を、なお集輯書写したものであろう。ハ〇九―一a

―六三―一

読書指南　市野〔迷庵〕（光彦）　近写（〔浜野知三郎〕）

大一冊

黄土色表紙（二七・二×一九・二糎）双辺刷枠題簽に「読書指南」と書す。扉「学令広洋」と書し抹消され、「読書指南」と題す。書名左傍に点を打つ。扉右下に「青帰書屋（市野迷庵書室名）原本」とあり。裏に「此一冊市野光彦手沢原本渋江全善就此本抄写一／本以伝于世間此書不可出笈之秘箱、今茲書肆清水／其平携来求賈遂尽嚢中而投之余向屢訪翁毎与全／善、四十年前如一日今也二子共逝矣、余尚碌々読書／翁得此書一喜一懼不耐嘆賞題一言于首以告子孫／云文久元年辛酉重陽後一日　養竹森立之」。また小字にて「大正四年春日偶目全善手鈔本於古書陳列会六月初四如雷／鬻書中有迷庵原本転帰竹苞楼乃書（見せ消にて抹消）写其書皮及首題／以備後攷　乙卯六月初六　竹清邨翁／抽斎抄本迷庵原本皆帰湖南子云　竹清又識」の識語あり。「読書指南／目録」「引用書目」（末に「明治四十年九月九日／以渋江全善手抄牒三邨翁鈔補」とあり）を冠せ、内題「読書指南」。巻頭「小引」の末に「文政紀元戊寅八月　江戸　市野光彦記」と識す。無辺無界十行、行廿字小字双行。字面高約一五・五糎。折目の表丁に丁附あり。眉上に少しく校勘あり、「翁云」等ともあれば、三村竹清のものか。末に「校訂諸本目録」「読書指南／附録」を附す。附録には「小学之書雖令所不載然欲学九経者不明小／学則無能知其本也故論其概畧光彦記」と識す。「右読書指南壱策市野光彦字俊卿所著其受業／弟子渋

江全善字道純所謄光彦雖作之未有為／脱稾全善始就其草而為浄本此本即是蓋当時／学者皆由此本以得伝写而此書遂行于世則此／本固無比之琛策也余向日得光彦草本今又獲／此冊完成双璧矣書呂告後人云爾文久元辛酉／九月重陽後一日識其光彦原本則家大人為識／語題於策首亦今日艺恣叟拙者森養 真源 約 之」の跋あり。巻末に、「一読書指南来歴不申上候忘居 申 候 重野 成 斎先／生ニ拝借仕候史料採訪時代先生之御手ニ入／申候様子原本ハ先生之筆生山下某之筆ニ御／座候　米津仲次郎」「明治四十年丁未冬十二月二日以米津鉄牛君名維／則字柔嘉小字仲次郎三河国碧海郡米津人自鈔本写了／伊勢洞津　三邨翁」の元奥書あり。文中「丁未十一月念六夜鈔」「丁未十一月二十七日鈔」「丁未十二月初二鈔」等と竹清の抄写記が識さる。全七十四丁。

竹清の識語に見える湖南子内藤虎次郎は、昭和十年、京都弘文堂から氏蔵本を翻印出版した。その校語に曰く、「読書 指南一巻市野迷庵原著其門人渋江抽斎所補修也内藤湖南先生曩獲抽斎手書稿本係於森枳園之旧蔵即人閑所伝写此書之原本也先生嘗謂此書提倡樸学根本漢唐体例該備叙述簡約初学之士可以為津梁欲付印以広流伝者有年矣適弘文堂主人請自任其事乃以稿本授之刷印之業未半先生遽捐館舎今方手民告功畢爰志此書刊行之由並傷先生之竟不及見其成也乙亥六月」と。共編者に名を連ねる小島祐馬氏の筆か。

本書は経学入門の名著で、椒斎との邂逅により、朱子学から李唐考勘の学に転じた著者晩年の思想がよく現れ、迷庵のものとしては伝写本もやや多い。「日本藝林叢書」の共編者であった三村清三郎氏の蔵本を、浜野氏が借り、手写したものであろう。八〇九―一a―六四―一

追　記

一、三村竹清氏の手識に「斎藤拙堂手稿大槻西嵓遺稿叙用／古香書屋界帋曽見拙堂所用條印／曰古香者古香氏其書屋号……」とあり、本稿もそれに従ったが、古香書屋を号するほぼ同時代の人に、一字違いの斎藤竹堂がある。拙堂は精里、竹堂は侗庵をその師とし、共に昌平黌に学んだ。竹堂は初め仙台で大槻平泉に学んでおり、本書を抄写する所縁もある。字体は正楷で謹厳に書かれているが、名筆で鳴らした拙堂のものとはやや異るように感ぜられる。筆者は拙堂竹堂の楷書を多くは見ていないので断定を避け、今注記するに留める。

二、西尾市立図書館岩瀬文庫に「精里二集原稾詩・文」（外題）

半二冊、「精里三集文稾五巻」半二冊、「精里三集文稾五巻詩稾二巻」半二冊、「精里三集稾別本」（扉題）半一冊の計七冊の稾本が存する。文稾二冊は初稾初編本かと思われ、次の文稾一冊は第二次稾本（第二次の編成本）のようである。詩稾一冊は本文庫蔵本の前段階の編成本か。別本は未だ編修の手が殆ど加わっていない。

三、本書並びに次掲本は、抽斎自筆の書と較べ、ほぼ抽斎筆と見てよいのではないかと思う。抽斎は例えば慶応義塾図書館（四谷）の富士川文庫本「直舎伝記抄存巻一―三・五国侍二巻」半三ッ切六冊等に「籀斎校定」の印を押捺している。抽斎の抽の字は吉川幸次郎氏が既に指摘しているが、説文段注に云う如く書を読む意で、籀と同意であり、籀斎の署名も用いた可能性がある。

尚森潤三郎氏の「考証学論攷」所収「考証学者伊沢蘭軒父子及び渋江抽斎森枳園の一面」中に、弟柏軒から兄榛軒に送った天保元年十月の一門自筆寄せ書書簡の写真が掲載されている。奇しくもその表に道純、裏に全菴の手跡が見られる。氏は「景珉、全庵は姓が分らぬ。後の榛軒の書簡に『景珉全庵は勉学するや』と云ふてある。想ふに年少の門人であらう」と注記されている。この全菴が恐く滝波敦教ではないか。今暫く抽斎が学の進んだ全菴に師の遺稾の蒐集整理浄書を依頼し、それを自ら手写したものと見做しておく。